井相田C遺跡　5

－井相田C遺跡第３次発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集

2000

福岡市教育委員会

井相田C遺跡　5

－井相田C遺跡第３次発掘調査報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集

遺跡調査番号8926
遺跡略号　ISO－C－3

2000

福岡市教育委員会

序

九州の北岸に位置する福岡市域はその地理的条件から、古代より大陸や朝鮮半島からさまざまな文化を受容し栄えてきました。

福岡市ではさまざまな開発によって失われていく埋蔵文化財について事前の調査を行い、その保存策に努めています。

本書は共同住宅ビル建設にともなう井相田C遺跡の発掘調査報告書です。井相田C遺跡は福岡市南東部にあり、古代集落跡として著名です。

調査によって弥生時代と古墳時代の集落が明らかとなりました。また、旧石器時代や中世の出土品もあり、この地に住んだ先人達の生活の一端を垣間みることが出来ました。こうした成果は、本地域の歴史や文化を語る上で重要な手がかりとなるものです。

本書が文化財保護の理解を深める一助となり、併せて研究資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査において費用負担をはじめとするご協力を賜りました城戸次勝様に厚くお礼申し上げます。

平成12年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　憲一郎

例言

1、本書は、共同住宅建設にともない、福岡市教育委員会が1989年6月23日～1989年9月19日に発掘を実施した、井相田C遺跡第3次調査の報告書である。

2、本書使用の遺構実測図は、牟田裕二、上方高弘、城戸康利、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏が行った。

3、本書使用の遺物実測図は中野聡子、森部順子、吉留秀敏が作成し、浄書は吉留秀敏、菅波正人が行った。

4、本書使用の写真は吉留秀敏が撮影した。

5、本書では都合により個別の遺構実測図が掲載できていない。これについてはいずれ機会を得て何らかのかたちで再報告したい。

6、本書の執筆、編集は吉留秀敏がおこなった。

7、報告書の表記について

井相田C遺跡の発掘調査報告書はすでに数冊が発行されている。しかし、それらには遺跡名などに統一がなく、本遺跡の調査、報告が増加すると予測されるだけに、今後混乱をまねくおそれが生じてきた。こうした理由により本報告から井相田C遺跡の調査報告書は、表題を「井相田C遺跡」とし、発行順に1、2、3…と番号を付加して表記することとした。なお、既報告書を下記の通りの番号で表するので、本報告書は「井相田C遺跡　5」となる。

1　山口譲治編「井相田C遺跡Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集　1987

2　瀧本正志編「井相田C遺跡Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集　1988

3　占武学編「井相田C遺跡 第5次　高畑遺跡 第14次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集　1996

4　大庭康時編「井相田C第6次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集　1997

8、本書に関わる図面、写真、遺物などの資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される。

本文目次

第1章　はじめに …… 1
1、調査に至る経過 …… 1
2、調査の経過 …… 1
3、調査組織 …… 1
第2章　地理的歴史的環境 …… 2
1、地理的環境 …… 2
2、歴史的環境 …… 2
1)旧石器時代～縄文時代草創期 …… 2
2)縄文時代 …… 2
3)弥生時代 …… 3
4)古墳時代 …… 3
5)古代 …… 3
6)中世以降 …… 4
3、井相田C遺跡、仲島遺跡の調査 …… 4
1)遺跡名と調査次数について …… 4
2)井相田C遺跡、仲島遺跡の調査成果 …… 6
第3章　調査の記録 …… 7
1、調査の概要 …… 7
1)調査対象地の概要 …… 7
2)試掘調査の概要 …… 7
3)発掘調査の概要 …… 7
2、調査の成果(遺構の検出状況) …… 7
3、古墳時代、古代の遺構と遺物 …… 10
1)竪穴式住居 …… 10
2)掘立柱建物 …… 12
3)溝 …… 12
4)段落ち状遺構 …… 18
5)土壙 …… 18
6)柱穴 …… 18
7)その他の遺物 …… 18
4、弥生時代の遺構と遺物 …… 22
1)竪穴式住居 …… 22
2)土壙 …… 22
3)その他の遺構出土遺物 …… 26
4)包含層出土の遺物 …… 30
第4章　まとめ
1、井相田C遺跡の地形復元と遺跡環境 …… 33
2、井相田C遺跡3次調査における集落遺跡の様相と出土遺物 …… 37

挿図目次

Fig. 1　井相田C遺跡周辺遺跡分布図……8
Fig. 2　井相田C遺跡の位置と範囲……9
Fig. 3　井相田C遺跡遺構全体図……11
Fig. 4　古墳時代～古代遺構内出土遺物(1)住居、建物、土壙……13
Fig. 5　古墳時代～古代遺構内出土遺物(2)溝……14
Fig. 6　古墳時代～古代遺構内出土遺物(3)段落ち状遺構……15
Fig. 7　古墳時代～古代遺構内出土遺物(4)段落ち状遺構……16
Fig. 8　古墳時代～古代遺構内出土遺物(5)段落ち状遺構……17
Fig. 9　古墳時代～古代遺構内出土遺物(6)、包含層出土遺物(1)……19
Fig.10　古墳時代～古代包含層出土遺物(2)……20
Fig.11　古墳時代～古代包含層出土遺物(3)……21
Fig.12　弥生時代遺構内出土遺物(1)土壙……23
Fig.13　弥生時代遺構内出土遺物(2)土壙……24
Fig.14　弥生時代遺構内出土遺物(3)土壙……25
Fig.15　弥生時代遺構内出土遺物(4)土壙……27
Fig.16　弥生時代遺構内出土遺物(5)土壙……28
Fig.17　弥生時代包含層出土遺物他(1)……29
Fig.18　出土石器(1)……31
Fig.19　出土石器(2)……32
Fig.20　出土石器(3)……33
Fig.21　井相田一帯における低位段丘微地形の復元……34
Fig.22　井相田C遺跡3・4次調査区の古墳時代後期遺構分布……38

図版目次

PL. 1……全景他
　1.遺跡全景（東から）
　2.流路SD05(北から)
PL. 2……竪穴式住居
PL. 3……竪穴式住居、掘立柱建物
PL. 4……溝、土壙
PL. 5……竪穴式住居、土壙、その他
PL. 6……SD01、05出土遺物
PL. 7……SD05出土遺物
PL. 8……SK27.28出土遺物
PL. 9……SK31出土遺物
PL.10……土壙出土遺物等
PL.11……出土石器(1)
PL.12……出土石器(2)

表目次

Tab. 1　井相田C遺跡、仲島遺跡次数訂正一覧
Tab. 2　井相田C遺跡3次調査出土石器類一覧

第１章　はじめに

１、調査に至る経過

1988年2月17日に城戸次勝氏（以下、甲とする）より、市街化区域である福岡市博多区井相田二丁目２－６地内における共同住宅建設に関する開発事前審査願の申請がなされた。これを受けて福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、乙とする）では事前審査をおこなった。この時点で対象地は遺跡の記載がない範囲に含まれていた。しかし、当時西側に隣接する新聞社工場敷地、板付中学校敷地において相次いで遺跡が発見調査されていた。付近は近年まで水田地帯で遺跡の存在が未確認であり、遺跡範囲など分布調査が不十分であった。こうした点から埋蔵文化財課では遺跡の確認調査の必要を認めた。そこで乙は甲の許可を受け、1988年3月15日に試掘調査をおこなった。対象面積は1,337㎡である。

試掘調査の結果、弥生時代から奈良時代の竪穴、土壙、溝などが確認された。これを受けて、甲乙は文化財保護についての協議をおこなった。しかし、建築工事の計画上、この遺跡の保存は困難であり、発掘調査をおこなって記録にとどめることとなった。甲乙は協議を重ね、調査日程などについて打ち合わせをおこない、調査対象を建物部分に限定すること、1989年度に発掘調査をおこなうこと、一部国庫補助を受けることをそれぞれ確認し、甲乙両者は発掘調査委託契約を締結した。

２、調査の経過

発掘調査は1989年6月23日～1989年9月19日におこなった。

調査はまず重機による表土掘削から開始した。排土は敷地内東側の調査区外に置いた、6月29日から作業員を導入し、攪乱土の除去と遺構検出を進めた。調査開始後、竪穴式住居跡、建物などが多数存在することが判明した。また、７月は梅雨による降雨が多く、さらに調査面が周囲の水田面や用水路より低いために常に湧水や冠水があり、排水ポンプを駆動しながらの作業となり、困難を極めた。特に調査中に数回の集中豪雨があり、隣接する水路が溢れ、そのつど調査区全体が冠水した。

調査は８月中に遺構調査をほぼ終了し、9月中旬までに実測図作成、全体写真撮影を終了し、重機による埋め戻しを経て1989年9月19日に全作業を終了した。

３、調査組織

遺跡の調査にあたって以下の組織を準備した。また、調査、整理作業では各方面の協力を頂いた。

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第二係

教育長　佐藤善郎　　部長　井口雄哉

課長　柳田純孝　　第二係長　飛高憲雄

調査庶務：松延好文

事前審査：横山邦継、米倉秀紀、大庭康時

調査担当：吉留秀敏　　調査補助：牟田裕二、上方高弘、城戸康利

整理作業：日永田能成、尾崎君枝、甲斐由嘉子、木村良子、丸井節子、宮坂瑞、森部純子

調査・整理協力：中野聡子、屋山洋、立石真二

調査整理にあたって下記の方々・機関のご教示やご指導を賜った。記して謝意を表したい。（敬称略、順不同）上村建設株式会社、福岡市埋蔵文化財センター

第２章　地理的歴史的環境

１、地理的環境

井相田Ｃ遺跡は福岡市博多区に所在し、市域最南端に位置している。地理的には変成岩、花崗岩基盤の月隈丘陵と更新世火山灰台地である麦野丘陵に挟まれた沖積平野の低位段丘面にあたる。この沖積地は三郡山塊南端の宝満山西麓に端を発する御笠川と周辺から合流する牛頸川、諸岡川などの小河川によって浸食、形成されている。なお、本遺跡は御笠川下流域の西岸低位段丘面に立地し、現状では比高差のない平板な地形となっている(Fig.1)。

井相田Ｃ遺跡の北西約1.5kmにある板付遺跡周辺の地質環境については古川博恭氏による検討がある。なお現在、井相田Ｃ遺跡のある低位段丘面内には明瞭な段丘崖が見あたらない。御笠川からみた次なる段丘は中位段丘面に相当する麦野丘陵の東斜面となる。近年の調査の結果では、この低位段丘面に御笠川の氾濫によるとみられる谷地形や浸食から免れた微高地が数カ所で確認されている。しかし、それらの形成地形はいずれも河川からの堆積物で埋没し、また一部では農耕地造成などの人為的な削平により、地表にその痕跡を留めてはいない。この河川による埋没は井相田Ｄ遺跡第２次調査の成果などから、縄文時代前期後半に始まっているとみられた。この御笠川下流域一帯の低位段丘面にはおおよそ縄文海進以降にほぼ全面を被覆する新たな河川堆積があったと考えられる。

本地域は福岡市による準工業地域にあたり、最近になって福岡空港、高速道路網の整備などと共に工場、倉庫、共同住宅などの建設が進み、福岡都市圏の拡大が急速に進んでいる。しかし、ごく近年まで広い水田地帯であった。

２、歴史的環境

ここで井相田Ｃ遺跡を中心に考古学上の歴史的な変遷を時代ごとに概観したい。ただし、本地域はこれまでけっして十分な調査が進められているとは言い難い。それでも旧石器時代から中世、近世に至るまでの資料が断片的に見いだされている(Fig.1)。以下ではこれを時代ごとに記述する。

1)旧石器時代～縄文時代草創期

井相田Ｃ遺跡付近の御笠川流域における旧石器時代の資料は多くない。調査でも断片的な出土に留まる。西岸では諸岡遺跡、諸岡館址遺跡、板付遺跡、麦野Ａ遺跡、笹原遺跡、井相田Ｃ遺跡１次などがある。東岸には大野城市成屋形遺跡、釜蓋原遺跡などがある。諸岡遺跡や板付遺跡では数地点にナイフ形石器、台形石器、剥片、石核や細石刃、細石刃核などが出土している。麦野Ｂ遺跡では今峠型ナイフ形石器、台形石器と細石刃が出土している。笹原遺跡では細石刃核削片が出土している。井相田Ｃ遺跡第１地点では尖頭器、原の辻型台形石器が出土している。太宰府市成屋形遺跡ではナイフ形石器や尖頭器、大野城市釜蓋原遺跡では細石刃が出土している。この地域では縄文草創期の土器類の発見はないが、板付遺跡や笹原遺跡で出土している細石刃核、削片には船底形を呈するものがあり、この時期に位置付けられる。これらの遺跡は総じて中位段丘斜面から低位段丘上位面に分布している。このように後期旧石器時代から縄文時代草創期段階において、低地を見下ろす段丘崖に沿ったこうした場所が狩猟採集活動や居住の要所となっていたことがわかる。

2)縄文時代

早期には御笠川左岸の板付遺跡や諸岡遺跡で押型文土器や石鏃、同右岸の釜蓋原遺跡で押型文土器片や石鏃などなどが出土している。この他に笹原遺跡や井相田Ｃ遺跡１次で磨製石鏃、鍬形鏃などの

当該期の採集遺物がある。しかし、この時期の安定した集落はなお発見されていない。

同前期～中期の資料はさらに少ない。前期では高畑遺跡１２次や井相田Ｄ遺跡２次で旧河道を埋める砂礫層中から轟式土器片や抉状耳飾りなどが出土している。井相田Ｄ遺跡２次では地表下約５ｍの深さで根株、倒木などが検出されている。これらの樹木はアカガシなどの広葉樹であり、そのＣ14年代値はBP4800±90であるという。埋没林を覆う砂礫層は縄文海進以降の御笠川水系の堆積物とされ、この地域の地形、景観の推移を考える上で注目される成果である。

なお、この両遺跡は直線で300mの位置にあり、周辺に当該期遺跡の存在が予測される。中期については未確認である。また、南八幡遺跡６次や麦野Ｂ遺跡３次では「陥穴状」遺構が検出されている。アカホヤ火山灰の二次的流入などから中期から後期の構築が予測されている。

後期から晩期にかけても資料は多くないが、板付遺跡や諸岡遺跡で鐘崎式系や北久根山式系の土器片が少量出土しているが、集落などの確認はない。また、晩期前半から中葉の土器類も板付遺跡などで少量出土している。

縄文時代晩期後半（弥生時代早期）から弥生時代前期前半は本地域では遺跡の急増がみられる。特に板付遺跡では初期の水田、用水路などの遺構が検出されている。板付遺跡以外にも福岡平野の沖積地に水稲耕作を基盤とした集落が多数出現している。

3)弥生時代

弥生時代前期から中期には遺跡がさらに急増する。

御笠川左岸では板付遺跡、諸岡遺跡、高畑遺跡、井相田Ｃ遺跡４，５次、麦野Ｃ遺跡５次、南八幡遺跡９次、雑餉隈遺跡５次、大野城市川原遺跡、仲島遺跡などがある。

右岸では低地部の雀居遺跡、下月隈Ｃ遺跡など、また月隈丘陵の宝満尾遺跡、立花寺遺跡、金隈遺跡、影ケ浦遺跡、持田ケ浦遺跡、大野城市中寺尾遺跡、御陵前ノ椽遺跡、石勺遺跡などがある。

このなかで板付遺跡は環濠集落を形成し、集落の規模、周囲の水出遺構、灌漑施設の規模、青銅器などの副葬や埋納など出土遺物などからみて、この時期の拠点的集落と考えられる。丘陵部の遺跡は貯蔵穴群や墳墓である。低地部ではこの時期になると水田開発が急速に進んだものと考えられる。

弥生時代後期になると集落遺跡は継続するが、月隈丘陵の遺跡はむしろ減少する。低地部では、板付遺跡周辺の中小河川に大規模な井堰の構築が那珂君休遺跡、那珂久平遺跡、高畑遺跡などにみられる。また、井相田Ｄ遺跡２次では後期中頃段階の「池状遺構」がみられる。この地域では後期以降に水田灌漑施設の大規模化があったとみられる。その背景には新たな水田耕地の拡大も考えられよう。

4)古墳時代

古墳時代前～中期には板付遺跡、高畑遺跡、井相田Ｃ遺跡５次などに遺構が確認される。

古墳時代後期には各所に新たな集落が形成される。御笠川左岸の丘陵上では板付遺跡、高畑遺跡、南八幡１～３、９次などに住居跡群がみられる。右岸では雀居遺跡、立花寺Ｂ遺跡６次、立花寺遺跡などがある。雀居遺跡、立花寺Ｂ遺跡６次は御笠川の自然堤防上に立地し、立花寺遺跡は丘陵上に立地する。いずれも竪穴式住居、掘立柱建物などで構成される集落である。墳墓は月隈丘陵の各所に前半期から後期群集墳まで集中して構築されている。

5)古代

古代になると遺跡の分布に変動がある。まず御笠川左岸では沖積微高地上に井相田Ｃ遺跡１、２次や仲島遺跡のように掘立柱建物を主体とする集落が出現する。また、微高地縁辺には水出が造成されている。それに対し丘陵上には麦野Ｂ遺跡１～４次、麦野Ｃ遺跡１、３，５次、南八幡遺跡、雑餉隈遺跡など、竪穴式住居を主体とする集落が広く出現する。南八幡遺跡８次では円面硯、瓦類、雑餉隈

遺跡９次では大型掘立柱建物が検出されている。この両遺跡は約250mの距離にあり、付近に官衙的施設の存在が推定されよう。これらの丘陵上の集落は奈良時代中頃から平安初期までの短期間に出現、廃絶している。居住者の性格について非農耕民的性格が指摘されている。

御笠川右岸では立花寺Ｂ遺跡、立花寺遺跡、下月隈Ｃ遺跡などがあり、立花寺Ｂ遺跡は御笠川に沿った自然堤防上の集落、立花寺遺跡は丘陵上の大規模な地山整形を伴う集落である。いずれも比較的規模の大きい掘立柱建物、井戸などで構成されている。出土遺物にも輸入陶磁器の優品が多く、奈良時代末から平安前期における「筵田駅」に関連する遺跡と考えられている。下月隈Ｃ遺跡遺跡は両遺跡の中間の低地にあり、同時期の水田跡が確認されている。

6)中世以降

御笠川左岸では丘陵上に板付遺跡、諸岡遺跡、麦野Ａ遺跡１，３，４，６次、麦野Ｂ遺跡１次など、低地部では井相田遺跡Ｃ、Ｄ遺跡などがある。麦野Ｂ遺跡１次で中世の遺構が確認される。麦野Ａ遺跡１次では１５～１６世紀代の掘立柱建物、井戸、溝、土壙などが、旧道に沿って配置、検出されている。低地部では古代末～中世初期を境に集落関連遺構が減じ、かわって水田畝畦や水路などの水田遺構が広域に分布するようになる。低地内の微高地はこの時期に大規模な削平を受けて水田に造成されているようである。なお井相田Ｄ遺跡１、２次では１１世紀後半から１３世紀の水田跡が広く検出され、条里との整合が注意されている。

御笠川右岸では旧自然堤防上の立花寺Ｂ遺跡に１２～１４世紀の掘立柱建物、井戸、木棺墓などがあり、館施設の存在が推定されている。下月隈Ｃ遺跡では古代水田の埋没後、永く集落が設けられていたが、１４世紀段階に廃絶し再び水田となっている。

3、井相田Ｃ遺跡、仲島遺跡の調査

1)遺跡名と調査次数について

井相田Ｃ遺跡とその周辺ではこれまでに８回の発掘調査がおこなわれている。ところが、遺跡名と調査次数に混乱が生じている。これについては報告書第458、519集でもふれられている。ここでは遺跡の概要に触れる前に若干の整理を行いたい。

まず、調査と遺跡名、次数決定の経緯をみたい。

1978年から大野城市仲島２丁目と隣接する福岡市博多区井相田１丁目から２丁目にかけての土地に相次いで建物建設に伴う埋蔵文化財の試掘調査がなされ、遺跡が確認された。大野城市側のこの一帯は「仲島遺跡」としてすでに周知化されていた。仲島遺跡は弥生時代から古代、中世に至る複合遺跡であり、国内ではほぼ唯一の弥生時代の貨布や、古代の人面墨書土器などが出土している。福岡市側で確認された遺跡も仲島遺跡の連続と考えられた。しかし、1981年発行の福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）にはこの場所に遺跡の記載がなかった。こうしたことから新たに確認されたこの遺跡を福岡市側でも「仲島遺跡」と称し、調査次数を設けることとなった。1978年から1984年までに仲島遺跡について３次の発掘調査がなされた。しかし、この調査の結果、大野城市側の濃密な遺構密度に対し、福岡市側の遺構密度は希薄であり、遺跡の縁辺との印象があった。

1984年7月に井相田2-1-26地において、工場建設に伴う事前調査で遺跡が確認された。この付近は麦野Ａ遺跡のある麦野丘陵に接する沖積地であり、それまで遺跡の存在が知られていない場所であった。そこで、新たな遺跡名として「井相田Ｃ遺跡」を設けた。この時点では仲島、井相田Ｃ両遺跡の拡がりや境界は明確にできていなかった。1985年に井相田Ｃ遺跡の第１次調査が行われると、古代の集落、井戸、溝などが検出され、人面墨書土器の発見など、仲島遺跡との関連が指摘された。

その後、周辺における試掘調査が相次ぎ、1989年までに井相田C遺跡第2，3次の発掘調査が実施された。遺跡の拡がりは北と東へ延びて仲島遺跡と連続する可能性が高まった。1994年には大野城市仲島遺跡に最も隣接する井相田2-8-3地の試掘調査がおこなわれ、遺跡の確認があった。

こうした結果からみて仲島遺跡と井相田C遺跡は、遺構密度に濃淡はあるものの、連続した遺跡としてとらえられることが確実となった。その後1995年までに井相田2丁目地内で3件の発掘調査がおこなわれた。調査は、井相田2丁目内下水道立会（第4次）、井相田2-8-3（第5次）、井相田2-1-62（第6次）と継続したが、下水道調査は成果がなかったために次数としては削除された。

1996年に改訂された福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）では、福岡市側の仲島遺跡は井相田1丁目地内に限定し、井相田2丁目地内の遺跡はすべて井相田C遺跡とされた。その結果、仲島遺跡第1～3次調査のうち、第1，2次調査地点は井相田C遺跡に含まれることになった。しかし、この時点での調査次数の訂正は行われていない。

1996～1997年に刊行された井相田2-8-3（第5次）、井相田2-1-62（第6次）の報告書では、発掘調査時の調査次数が使われている。ただし、福岡市埋蔵文化財センターへの資料収蔵・整理にあたって第6次調査は欠番であった第4次調査として変更、再登録された。

こうした経緯を踏まえて仲島遺跡、井相田C遺跡の境界と調査次数を確定したい(Tab.1)。

まず、両遺跡の調査次数は関係書類、台帳類、報告書、福岡市埋蔵文化財センターの収蔵管理への影響があるために、極力変更しないことを前提とし、表1のようにする。

つぎに両遺跡の境界は、井相田1丁目内では1996年福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）を順守する。ただし井相田2丁目内では第2次調査報告書（179集）で最初に示された遺跡境界を生かし、仲島遺跡第1，2次調査地と井相田C遺跡5次調査地の間を略南北にぬける用水路を境界に変更する。そして、1丁目の遺跡範囲と接合させる(Fig.2)。これによって、過去の遺跡名称や調査次数は変更することなく利用できる。また、大野城市との遺跡名称の連続性も確保できることになる。

もちろんこの新たな境界は業務上の区分であり、遺跡の性格や構造とは関連しないものである。これまでの発掘調査の成果からみて両遺跡は有機的関係が予測され、歴史的性格が語られる場合は、この境界や市域を超えて「仲島・井相田C遺跡群」と統合して呼称されることもあろう。

2)井相田C遺跡、仲島遺跡の調査成果

井相田C遺跡の調査は1999年段階で過去5回行われている。

第1次調査は、新聞社工場建設に伴い調査が行われた。旧地形は北から西側が僅かに下がり、南か

遺跡名(新)	遺跡名(旧)	所在地	面積(㎡)	調査期間	担当者	報告書
井相田C遺跡1次	井相田C遺跡1次	博多区井相田2-1-26	12,000	19850527-19851227	山口・杉山	152集
井相田C遺跡2次	井相田C遺跡2次	博多区井相田2-12-6	11,000	19860701-19870124	横山・瀧本	179集
井相田C遺跡3次	井相田C遺跡3次	博多区井相田2-2-6	740	19890623-19890919	古留	本書
井相田C遺跡4次	**井相田C遺跡6次**	博多区井相田2-1-62	3,481	19951106-19960301	大庭	519集
井相田C遺跡5次	井相田C遺跡5次	博多区井相田2-8-3	900	19950111-19950303	吉武	458集
仲島遺跡1次	仲島遺跡1次	博多区井相田2-	450	19780060-19780600	柳田・柳沢	未刊
仲島遺跡2次	仲島遺跡2次	博多区井相田2-	1,060	19830704-19830911	横山・下村	未刊
仲島遺跡3次	仲島遺跡3次	博多区井相田1-	500	19841117-19841128	杉山	未刊

Tab. 1　井相田C遺跡、仲島遺跡次数訂正一覧

ら東が微高地となる。集落関連の遺構は微高地上に集中して検出された。8世紀前葉から9世紀代の40棟をこえる掘立柱建物群を主に竪穴式住居、井戸、溝、畝状遺構などが検出された。また調査区中央を東西に横切る大溝は幅8m前後、深さ2m前後と大きく、奈良時代初頭までには掘削されていたと考えられた。建物群は主にこの溝の北側に展開する。建物群は規則的な配列があり、8～9世紀の間におおまかに5回の建て替えがある。一単位の建物群は基本的に庇付母屋と脇屋、倉庫からなり、これが2～3小群にわかれて変遷する。北部九州の古代の集落動向を探る資料として貴重である。また、大溝からは「酒坏」、「中南」、「□麻呂」などが記された墨書土器や人面墨書土器、斎串、船形木製品などが出土している。また、上面に中世水田遺構が検出された。中世には集落域は削平され、広く水田となるようである。

第2次調査は、第1次調査区の北隣で行われた。福岡市立板付中学校建設に伴う調査である。1次調査に連続する建物、井戸などがある。井戸内からは「衙」「遣賀」などが記された墨書土器、「額田部」「丸部」や多数の人数が記載された木簡などの出土がある。また、上層には中世水田、水路、溜井（池）などが検出された。中世の溜井（池）は水田灌漑用に掘られたと推定され、覆土からは椀、曲物、下駄などの木製品と共に人骨、卒塔婆、墨書木札（柿経）などが出土した。これらは中世後期（15世紀後半）に寺への奉献物などが整理され、この場所に廃棄されたものと考えられた。

第3次調査は、1次調査区の北方約200mの位置で行った。本書で報告する。

第4次調査は、第2次調査のさらに北隣で行われた。福岡市埋蔵文化財センター増築工事に伴う調査である。調査区内を東西に流れる自然流路の南側に弥生時代前期と古墳時代後期から奈良時代前期を中心とする集落跡が展開する。自然流路は幅30m以上あり、縄文時代晩期から奈良時代までの遺物を多く含み、わずかに中世の遺物を含んでいる。

第5次調査は、1次調査区の東方約200mの位置で行われた。調査区北端に自然流路があり、それより南側に遺構がある。遺構としては古墳時代と中世の溝と古代の建物などが検出された。この場所は古墳時代中～後期に水田開発があり、古代に一旦は集落縁辺となるが、中世に再び水田となる。調査区南端の自然流路は弥生時代から古代の多くの遺物と少量の中世遺物が検出された。また、解読は困難であったが2点の木簡が出土した。

仲島遺跡1～3次調査については、古代～中世の柱穴（建物）、溝などの検出があった。詳細は報告書が未刊であり不明である。

第３章　調査の記録

１、調査の概要

１）調査対象地の概要

調査対象地は井相田２丁目地内の南北約25m、東西約55m、面積1,377㎡の長方形の土地である。土地区画は整然としているが、これは戦後付近で行われた区画整理事業によるものである。ただし、この付近には少なくとも明治期の地図にも現存と共通する土地区画がみられ、広く御笠川流域に分布する条里遺構を踏襲した区画となっている。したがって、この調査対象地は条里の一単位である一町四方のおおよそ８分の１の範囲にあたっている。

この調査対象地は四方に異なる土地利用がある。東側は道路であり、西側は灌漑用の三面張りのコンクリート水路、北側は旧水田面に１mほど造成盛り土され、軽量鉄骨建物が建てられている。南側は調査時に水田として利用されていた。調査前の対象地は標高約11.5mであり、道路面より0.6mほど低い状況であった。

２）試掘調査の概要

試掘調査は1988年3月15日に実施した。東西に細長い対象地に対し、平行して中央部に二本のトレンチを設け、遺構の有無、性格などの確認を行った。調査は重機による掘削と手作業による遺構確認などを行った。

その結果、地表から約0.6～0.8m下がった位置で遺構面を確認した。遺構は多くのピット、溝、土壙などであり、出土遺物から弥生時代から奈良時代のものと推定された。

遺構面までの堆積層は地表下0.25mまでは現在の水田耕土、床土（１層群）であり、さらに地表下0.6m付近までは水田床土の黒層（２層群）であり、西側では一部に地表下0.8mまで黒色粘質土（３層群）の堆積があった。遺構面は黄灰色粘質土（４層群）であり、下位にしたがいしだいに砂礫を含み礫層に変わってゆく。この礫層は段丘礫層であり、付近の沖積微高地の基盤を形成している。なお、２，３層群には遺物が含まれ、いわゆる遺物包含層をなしている。このなかには弥生時代から中世に至る遺物を含んでいたが、遺構面は捉えられなかった。

３）発掘調査の概要

発掘調査は建物が占有する範囲に対しておこない、駐車場となる道路寄りの東側は保存地であり、掘削土置き場や調査事務所設置場所として利用した。なお調査地の土壌は砂質～シルト質の水成土壌であり、また周辺は水路、水田、盛土造成地としていずれも軟弱な地盤であった。梅雨期間の調査でもあり、壁面崩壊を避けるため安全を考慮し、土地境界から約2.5mの引きをとって調査区を設定した。調査範囲は東西約37m、南北約20mの約740㎡である。

調査は重機により表土（１層群）から２、３層群までの除去を行い、その後４層群上面での遺構検出、調査を人力で行った。４層群上面の標高は10.8～11.0mである。

２、調査の成果

遺構の検出状態（Fig.3、PL.1-1）

調査範囲からは竪穴式住居１２、掘立柱建物５、土壙１３、溝８、柱穴２１０、段落ち状遺構などを検出した。遺構はいずれも大きく削平を受け保存状態は良くない。竪穴式住居は深くても10cm程

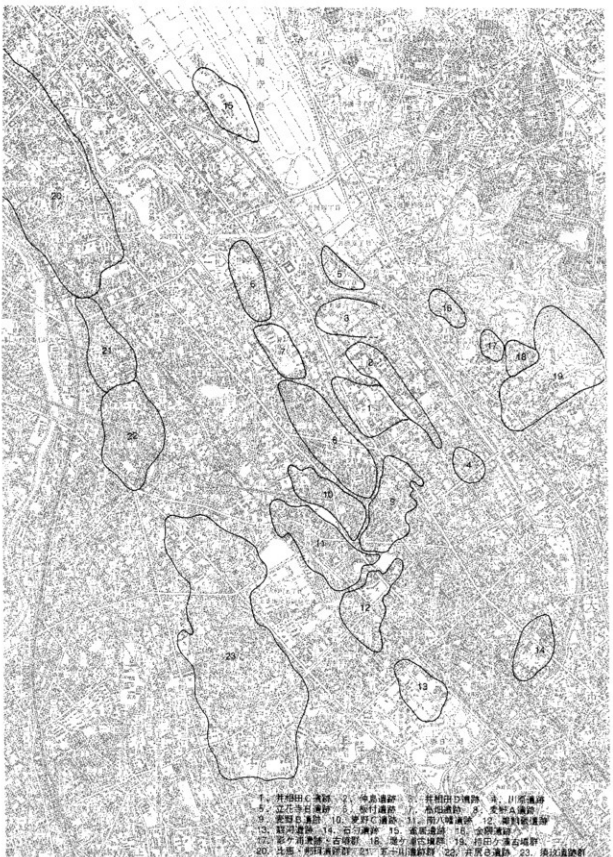


Fig. 1　井相田C遺跡周辺遺跡分布図（1／25,000）

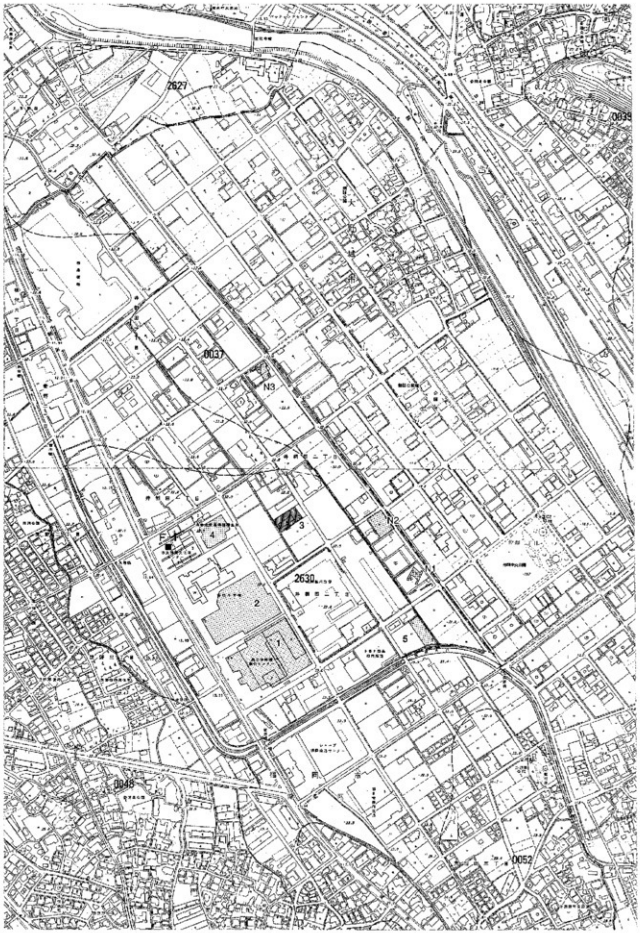


Fig. 2　井相田C遺跡の位置と範囲　　N1～N3は仲島遺跡

度の遺存であり、多くは検出段階で住居内床面が露出していた。こうしたことからこの範囲はある時期に少なくとも0.5m以上の削平があったと予測された。

今回の調査では以上のように多数の遺構を検出したが、時期はおおまかに古墳時代後期から古代と弥生時代の二時期に区分された。以下では、便宜上これを分けて報告する。遺構番号は混乱を避けるために調査時のまま使用している。

3、古墳時代、古代の遺構と遺物

1)竪穴式住居（Fig.4、PL.2•3）

SC04　調査区西端で住居のコーナー部分を検出した。隅丸方形住居とみられる。検出段階でSD02に切られているのが確認できた。遺構のほとんどは調査区外に展開するとみられる。床面まで最大15cmの遺存があった。現状で東西2.8m以上、南北4.8m以上の規模を測る。

住居覆土内から少量の遺物が出土した(Fig.4)。遺物には須恵器、土師器片などがあり、須恵器坏蓋(1)、坏身(2)、高坏脚部(3)、土師器甕(4)などがある。小田富士雄編年Ⅲb期である。

SC07　調査区中央南端で住居のコーナー部分を検出した。隅丸方形住居とみられる。検出段階でSD27に切られているのが確認できた。遺構の半分は調査区外に展開し、削平のため西側のみが確認できた。現状で東西1.8m以上、南北2.5m以上の規模を測る。床面まで削平されている状況であり、掘削時の鍬痕とみられる凹凸が多数認められた。主柱穴は4本である。出土遺物は少ない。土師器甕口縁部(5)がある。6～7世紀頃の時期と考えられる。

SC08　SC07の東側3mで検出した。隅丸方形住居とみられる。遺構の南側は調査区外に展開する。現状で東西3.9m、南北3.2m以上の規模を測る。検出段階では壁に沿った溜り方が残り、床面は露出している状況であった。主柱穴は4本である。出土遺物は少なく、図化できるものはない。

SC09　調査区中央で検出した。隅丸方形住居である。SC17を切っている。東西3.8m、南北3.9mの規模を測る。検出段階で床面まで約5cmが遺存していた。東壁中央付近に白色粘土がやや集中し、竈遺構と見られたが、断面調査では基底部が僅かに残るだけで、構造、規模は明解に判断できなかった。主柱穴は4本である。床面下には掘削時の鍬痕とみられる凹凸が多数認められた。出土遺物は須恵器、土師器片がある。須恵器坏蓋(7)、坏身(8～10)、坏破片(11)、土師器甕(12)などがある。小田富士雄編年Ⅳ期である。

SC10　調査区中央北側で検出した。隅丸方形住居とみられる。SD36に切られている。遺構の北側は調査区外に展開するとみられる。現状で東西4.1m、南北2.5m以上の規模を測る。なお、検出段階で床面が露出している状況であり、北側では削平により床面も失われていた。主柱穴は4本と推定される。出土遺物は少ない。須恵器坏身(6)がある。小田富士雄編年Ⅳ期である。

SC11　調査区中央北寄りで検出した。隅丸方形住居である。検出段階でSC12、SK31を切り、SB22に切られているのが観察された。主軸は約4m離れてSC09と平行しており、同時期での存在など、何らかの関係が予測される。北壁中央付近に白色粘土がやや集中し、竈遺構と見られたが、断面調査では基底部が僅かに残るだけで、構造、規模は明解に判断できなかった。東西4.0m、南北3.9mの規模を測る。検出段階で床面まで約5cmが遺存していた。主柱穴は4本である。出土遺物は少ない。須恵器坏身(13)、土師器甕(14)などがある。小田富士雄編年Ⅳ期である。

SC12　調査区中央北寄りで検出した。隅丸方形住居である。検出段階でSC11に切られているのが観察された。主軸はSC11とほぼ45°振っており、掘り方を意識していると予測される。東西3.9m、南北3.7mの規模を測る。検出段階で床面まで約5cmが遺存していた。主柱穴は4本である。出土遺物

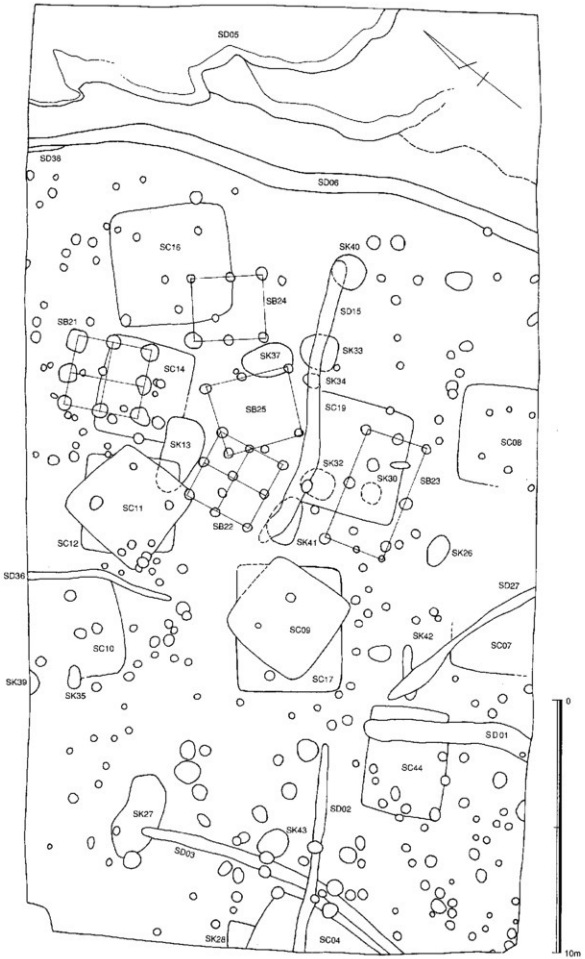


Fig. 3　井相田C遺跡遺構全体図

はない。

SC16　調査区東側で検出した。隅丸方形住居である。検出段階でSB24に切られているのが観察された。東西4.7m、南北4.7mを測り、調査区内では最大の規模である。検出段階で床面まで約5cmが遺存していた。主柱穴は4本である。出土遺物は少量の須恵器、土師器片があるが、図化できるものはない。

SC17　調査区中央で検出した。隅丸長方形住居である。SC09に切られている。主軸はSC09とほぼ45°振っており、掘り方を意識していることが予測される。東西5.0m、南北4.2mの規模を測る。検出段階で床面が露出していた。主柱穴は明確にできなかった。出土遺物はほとんどない。

SC19　調査区中央南寄りで検出した。隅丸方形住居である。SK30、32を切り、SD15、SB23に切られている。削平によりほぼ床面まで削平を受け、北側ではプランが失われている。東西4.5m、南北3.8m以上の規模を測る。出土遺物は少量の須恵器、土師器片があるが、図化できるものはない。

2)掘立柱建物（Fig.4、PL.3）

SB21　調査区中央北側で検出した二間二間の総柱式掘立柱建物である。検出時点でSC14を切っているのが確認された。建物の主軸方位はN-28°-Wを測る。東西約2.8m、南北約3.0mを測る。柱穴の掘り方は不整円形で0.5～0.8mである。柱穴内からの出土遺物はほとんどない。

SB22　調査区で検出した二間二間の総柱掘立柱建物である。検出時点でSC11、SK31を切っているのが確認された。また平面的にはSB25とも切り合い関係があるが、前後関係は不明である。建物の主軸方位はN-11°-Wを測る。東西約2.7m、東西約2.8mを測る。柱穴の掘り方は不整円形で0.3～0.4mである。柱穴内からは少量の須恵器、土師器が出土している。須恵器には回転ヘラ削り、ヘラ記号を有する破片(15)があり、小田富士雄編年Ⅲb～Ⅳ期の範疇と考えられる。

SB23　調査区で検出した二間二間の掘立柱建物である。建物の主軸方位はN-73°-Eを測る。桁行4.6m、梁行2.4mを測る。柱穴の掘り方は不整円形で0.3～0.4mである。出土遺物はない。

SB24　調査区で検出した二間一間の掘立柱建物である。検出時点でSC16を切っているのが確認された。建物の主軸方位はN-40°-Wを測る。桁行は南北で2.8m、梁行は2.6mを測る。柱穴の掘り方は不整円形で0.3～0.6mを測る。出土遺物はない。

SB25　調査区で検出した二間一間の掘立柱建物である。検出時点でSK37を切っているのが確認された。また平面的にはSB22とも切り合い関係があるが、前後関係は不明である。建物の主軸方位はN-54°-Wを測る。桁行は南北で3.0～3.3m、梁行は2.7mを測る。柱穴の掘り方は不整円形で0.3m前後である。出土遺物はない。

3)溝（Fig.5、PL.4）

SD01　調査区南側で検出した。SC44を切る。調査区中央付近に発し、南北方向に途中緩く屈曲しながら長さ6.5mが確認された。幅0.9m、深さ0.3mを測る。溝内には比較的大きな形状を保つ須恵器、土師器などが出土した。須恵器には坏蓋(18～20)、坏身(21)、鉢(22)、壺(23)、土師器には甕(24,25)、取っ手破片(26,27)などがある。須恵器は小田富士雄編年Ⅳ期である。

SD02　調査区西側で検出した。SC04、SD03を切る。調査区西端から東西方向にほぼ直線に長さ8.3mが確認された。幅0.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物には須恵器、土師器がある。須恵器には坏身(28,29)などがある。小田富士雄編年Ⅲb期である。

SD03　調査区西側で検出した。SD27を切り、SD02に切られる。SC04東壁に沿って調査区外から北東方向に緩い曲線を描き長さ11.5mが確認された。幅0.4～0.5m、深さ0.2mを測る。出土遺物は少なく、図化できるものはない。

SD06　調査区東側で検出した。SD38を切る。調査区を南北に緩い蛇行を繰り返しながら貫通して延

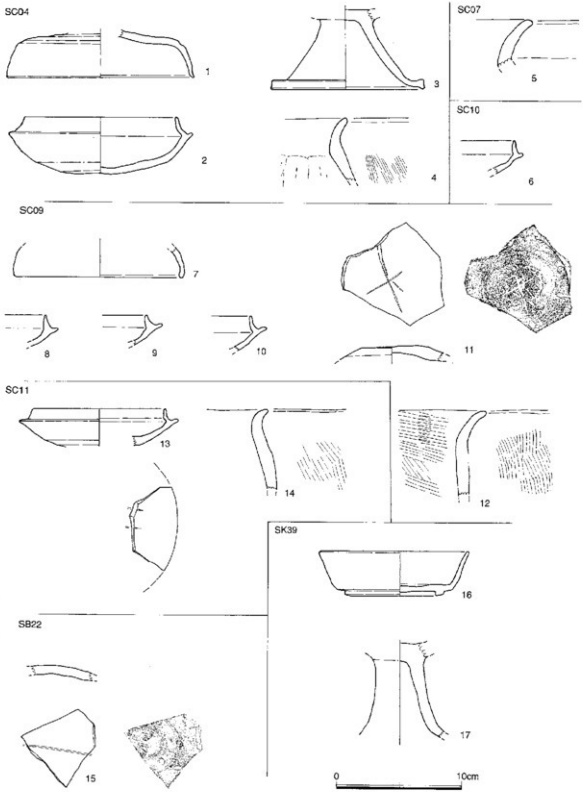


Fig. 4　古墳時代～古代遺構内出土遺物(1)住居、建物、土壙

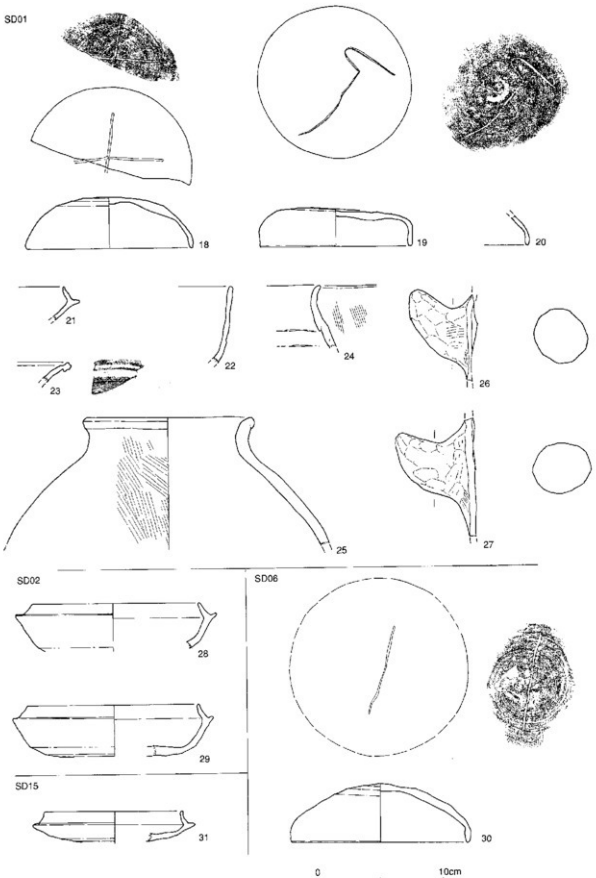


Fig.5　古墳時代～古代遺構内出土遺物(2)溝

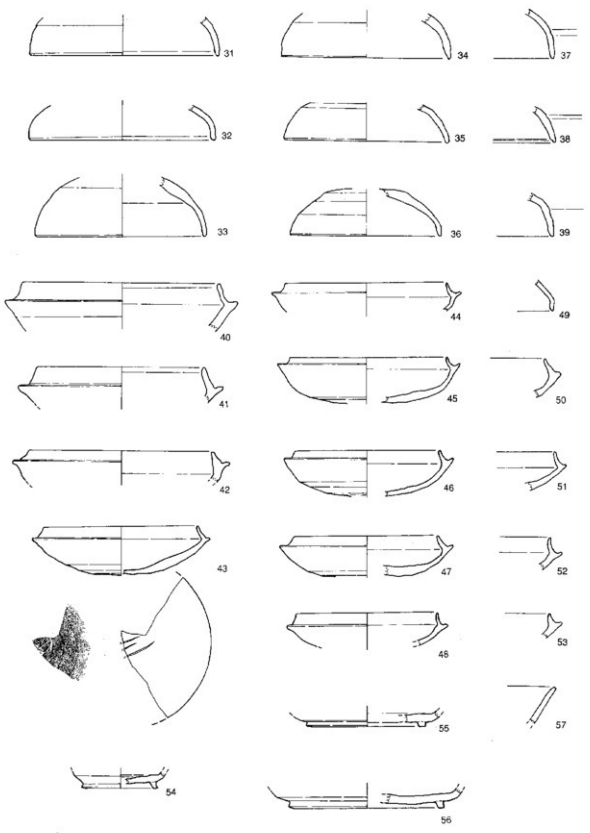


Fig. 6　古墳時代～古代遺構内出土遺物(3)段落ち状遺構

びる。長さ20.5mが確認された。幅0.4～0.9m、深さ0.2mを測る。出土遺物には須恵器、土師器などがある。須恵器には坏身(30)がある。小田富士雄編年Ⅳ期である。

SD15 調査区中央付近で検出した。SC19、SK32～34、40、41を切る。調査区中央から南北方向に長さ6.5m確認された。幅0.4～0.7m、深さ0.2～0.3mを測る。出土遺物には須恵器坏身片（31）がある。小田富士雄編年Ⅲb～Ⅳa期である。

SD27 調査区南側で検出した。SC07、SK42を切る。調査区中央から南北方向に長さ7.2mを確認した。幅0.3～0.8m、深さ0.1mを測る。出土遺物は少なく、図化できるものはない。

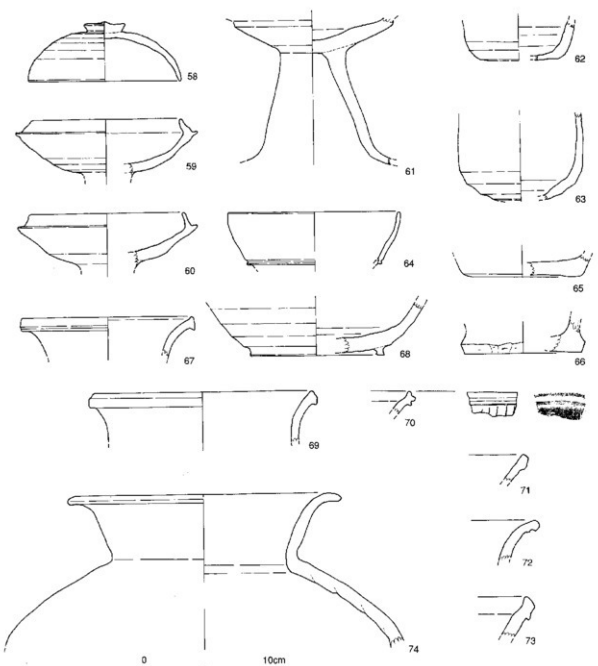


Fig. 7　古墳時代～古代遺構内出土遺物(4)段落ち状遺構

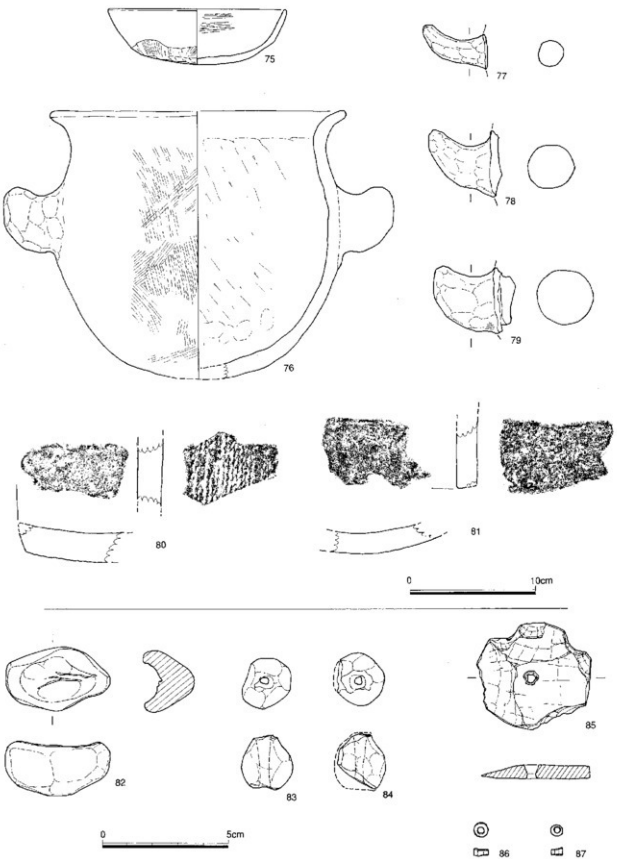


Fig. 8　古墳時代～古代遺構内出土遺物(5)段落ち状遺構

SD36 調査区北側で検出した。SC10を切る。調査区中央北端から南北方向に長さ5.7mを確認した。幅0.3m、深さ0.1mを測る。出土遺物は少なく、図化できるものはない。

SD38 調査区北東側で検出した。SD06と並行し、切られている。調査区北壁から南北方向に長さ1.4m確認された。幅0.2m以上、深さ0.1mを測る。出土遺物はない。

4)段落ち状遺構（Fig.6～8、PL.1-2）

SX05 調査区東側で検出された。SD06と並行しながら東へ向かって微地形がしだいに下がる地形をなしている。4層群を切り、その上面に黒色粘質土の堆積があった。南北方向の流路の一部と見られるが、大半は調査区外に展開している。規模は幅5m以上、深さ0.5～0.6m以上である。調査中は湧底からかなりの湧水があった。人為的な溝状遺構であるのか、自然地形であるのかは明らかにできなかった。また、地形の落ち際には数カ所の径2～3mの略円形の掘り方が認められたが、段落ちとの切り合いは不明であった。本遺構内からは多くの遺物が出土した。しかし、出土状況に一定のまとまりを示す状況はない。出土遺物には須恵器、土師器、瓦片、土製品、石製品などがある。須恵器には坏蓋(31～49)、坏身(40～57)、高坏蓋(58)、高坏(59～61)、椀(62,63)、甕(64)、鉢(65,66)、壺(67,68)、甕(69～73)などがある。土師器には壺(74)、甕(76)、椀(75)、取っ手(77～79)などがある。瓦は平瓦小破片(80,81)である。土製品には船形(82)と土玉(83,84)がある。石製品はすべて滑石製であり、有孔円盤(85)と小玉(86,87)がある。須恵器には複数の型式がみられ、小田富士雄編年Ⅲb期からⅦ期までを含んでいる。層位的出土状況での区分は認められなかったことから本遺構は最新段階のⅦ期に埋没したものであり、それ以前の遺物も含まれたものと見られる。なお、本遺構からは弥生時代の遺物も出土したが、これは第4節で報告する。

5)土壙（Fig.39）

SK39 調査区北側で検出された。遺構の約半分以上は調査区外に展開すると見られる。平面形は不明であり、長軸0.4m以上、幅0.9m以上を測る。須恵器、土師器片が少量出土した。須恵器には坏身(16)、高坏(17)がある。小田富士雄編年Ⅶ期である。

6)柱穴

今次調査では建物や住居を構成できなかった200基強の柱穴が検出された。多くが径0.2m前後の小さなものであり、まれに径0.5m程度の規模のものもあった。約五分の二の柱穴から遺物が出土したが、いずれも少量の土器細片などであり、時期が判断できる例は少ない。ただし、柱穴の多数に弥生時代、古墳時代遺構との切り合いがあった。したがって、弥生時代のものは少なく、古墳時代以降の時期に所属するものが多いと考えられた。図化できた主な遺物を紹介する。

SC14を切るSP08柱穴から出土した土師器壺(88)は、本遺跡では数少ない布留式新相（古墳時代中期）の時期である。

SP14はSC16を切り、須恵器坏身(89)が出土した。小田富士雄編年Ⅳ期に相当する。

SP15は調査区南西隅部にあり、須恵器坏蓋(90)が出土した。小田富士雄編年Ⅶ期に相当する。

SP35はSD03を切り、須恵器坏片(91)が出土した。その特徴から小田富士雄編年Ⅳ期に相当する。

SP59は調査区中央北側にあり、須恵器坏身(92)が出土した。小田富士雄編年Ⅳ期に相当する。

7)その他の遺物

遺構検出時並びに2、3層群より多くの遺物が出土した。そのうち古墳時代以降の遺物を報告する。出土遺物には須恵器、土師器、瓦がある。須恵器には坏蓋(93～107)、坏身(108～119)、壺(120,121)、甕(122～128)などがある。土師器には坏(132)、高坏(133)、甕(134～137)、取っ手(138～141)などがある。瓦は平瓦片(142～144)である。また、中世に属する青磁(129,130)、白磁片(131)も出土した。

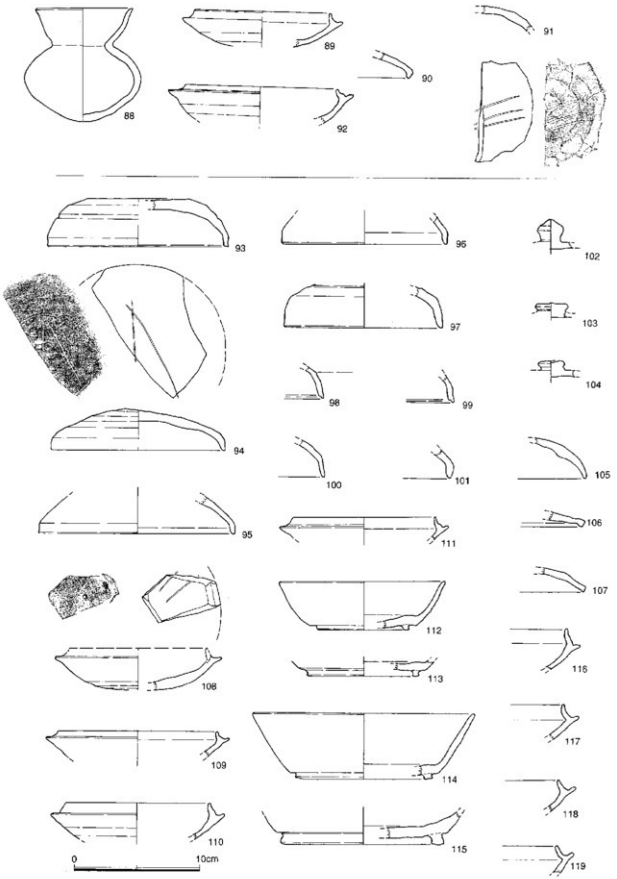


Fig. 9　古墳時代～古代遺構内出土遺物(6)、包含層出土遺物(1)

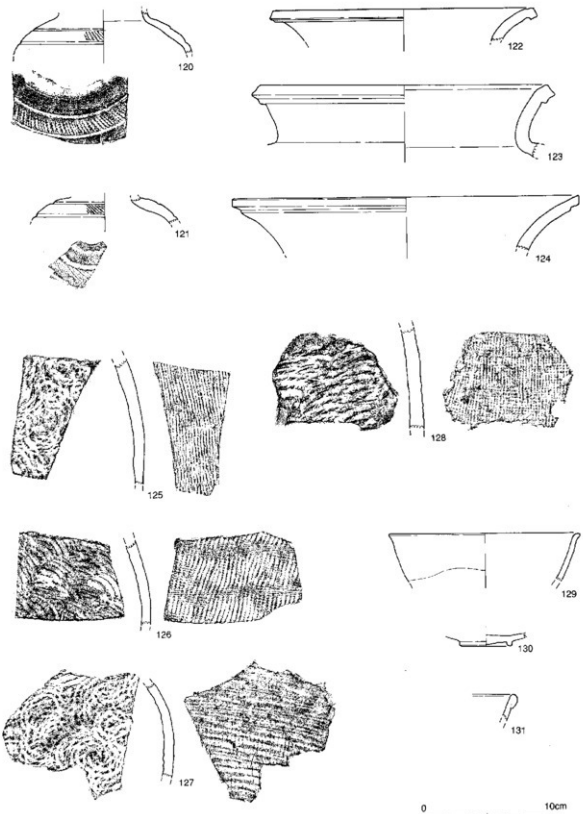


Fig.10　古墳時代～古代包含層出土遺物(2)

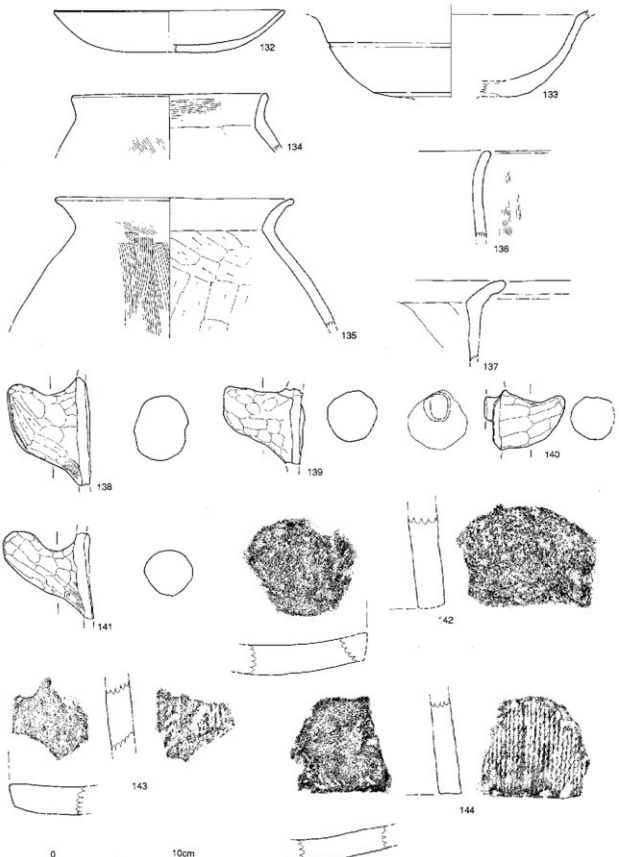


Fig.11　古墳時代～古代包含層出土遺物(3)

4、弥生時代遺構と遺物

1)竪穴式住居（Fig.18,19、PL.5）

SC14　調査区中央北側で検出した。一辺約3.6mの隅丸方形住居である。検出段階でSK31、SB21に切られているのが確認できた。本住居は床面まで5cm程度が遺存していた。中央に浅い落ち込みがあり、焼土が形成されていた。主柱は4本柱とみられるが、掘り方の径が20cm前後と小さく、不規則である。四周に壁溝が巡り、西、南側の壁溝内には不規則ながら小柱穴が多数認められた。出土遺物は少量の弥生時代の上器片が出土したのみである。弥生時代前期の住居と見られる。

SC44　調査区南西側で検出した。長方形住居である。検出段階でSD01に切られているのが確認できた。本住居は床面まで削平を受け、壁溝と柱穴のみが遺存していた。南北3.5m、東西4.2mの規模を測る。主柱は2本であるが、壁溝に沿って三間二間分の柱穴が確認された。また、床面西側に仕切り状の小柱穴列が見られた。また、東側壁溝に入り口状の柱穴列が付設する。出土遺物は少ないが、壁溝内から石斧(17)、複数の柱穴内から黒曜石石核(11)、剥片などが出土した。

この住居形態の類例は、雄銅限遺跡5次調査58号方形周溝遺構（弥生時代前期）や大谷遺跡2・3次調査A区1号住居（同中期）などがある。

本遺構は出土遺物から弥生時代前期の住居と見られる。

2)土壙（Fig.12～16、PL.5）

SK26　調査区中央南側で検出された。平面は不整楕円形で、長軸1.3m、幅0.9mを測る。出土遺物は少量の土器片が出土しているのみである。弥生時代に属すると見られる。

SK27(Fig.12)　調査区北西側で検出された。検出時点でSD03に切られているのが確認された。平面は不整楕円形で、長軸3.5m、幅1.6mを測る。

覆土中から土器片が散漫に出土した。土器片はすべて弥生時代に属する。土器には甕(1～4,6～8)、鉢(5)、壷(9)がある。甕は胴部中央が膨らみ底部へすぼまる形態で、口縁径がやや小さく、口唇部外方に断面三角形の無刻目突帯をもつもの(A類、1,2)と、口縁部が逆L字状に短く引き出すもの(B類、2,3)がある。底部は安定した平底のもの(7)と、径が小さく厚みをもち上げ底のもの(6)と平底のもの(8)がある。鉢は胴部が膨らむボウル状を呈し、口縁部は甕B類と共通する。壷は底部破片(9)である。断面の厚みがあり、外面にヘラ調整の荒い傷が残る。

SK28(Fig.13,14)　調査区中央西端で検出された。遺構の約半分は調査区外に展開すると見られる。遺構検出時にSC04に切られているのが確認された。平面は不整楕円形で、長軸1.1m以上、幅1.0m以上を測る。覆土中から多量の弥生土器が出土した。土器には甕(1～15)、鉢(16～20)、壷(21～37)がある。甕は口縁部がしまり強く外反し、胴部がやや膨らみつつ大きめの底部に達する形態である。大きく口唇部に刻目を施すもの(A類、1～3,5,6)と、口唇部に刻目を持たないもの(B類、1,4,7～10)がある。また、甕の底部破片(11～14)は、やや厚みがあり、指オサエにより底面外方に強く引き出されたものである。なお底部14の底面には籾圧痕が見られる。鉢は、胴部が膨らみ、口縁が強く外反する。このうち18は小破片であるが、復元すると浅い器形であり、内面に粘土帯を貼り付け口縁部を平坦に仕上げている。これは高坏の坏部破片であると見られる。これ以外は外面にハケ調整を施し、甕A類と同様に口唇部に刻目を施すもの(16,17)と、外面をナデ、ミガキで仕上げるもの(19,20)がある。壷は口縁部破片(21～23,26～30)と肩部(24,25,31,32)、底部(33～37)破片がある。個体差が大きいが、すべて球形の胴部から直線的にすぼまり、口縁部が強く外半する器形である。口縁部は粘土帯を貼り付け不明瞭な段をつけるもの(22,23)、外反部に浅い沈線を一条巡らせるもの(21)、頸部からそのまま外反して終わるもの(26～30)がある。肩部は低い段があるもの(24,31)と沈線を一条巡らせるもの

(25,32)がある。底部はすべて平底であり、胴部下半から短く台状に立つ。円盤貼り付けによる形成(37)もみられる。

SK30(Fig.16)　調査区中央南側で検出された。SC19床面下で確認された。平面は略円形で、径0.8mを測る。覆土中から少量の土器片と黒曜石片が出土した。土器片には甕片(1,2)がある。1は口縁部の破片であり、口縁部が強く外反する。口唇部は端面が断面コ字状にナデられていて、口唇部下端に浅い刻目を施する。2は頸部破片であり、二条の沈線を巡らす。外面は縦方向のハケ調整である。

SK31(Fig.15)　調査区中央北側で検出された。SC11に切られ、SC14を切っている。平面は不整楕円形で、長軸4.1m、幅1.9mを測る。覆土中からまとまった土器類が出土した。土器には甕(1～9)と壷(10)がある。甕はほぼ全体を復元できるものが3個体あり、他は破片であった。1,2は胴部下半が接合しないが、3は全体を復元できた。1は胴部中位が膨らみ、口縁部は外反し、口唇部下端に刻目を施す。底部はやや厚みがある。2は胴部過半に膨らみ、口縁部が大きく外反する。肩部上位に断面三角形の突帯が一条巡り、口唇部上端と突帯に浅い刻目を施している。底部は薄い。3は口縁部から底

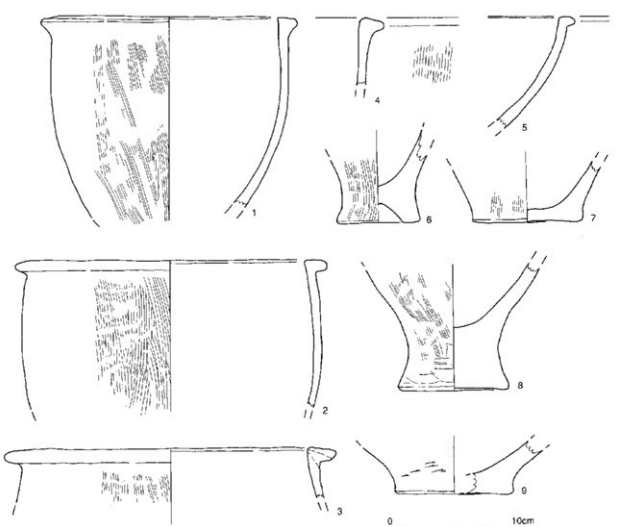


Fig.12　弥生時代遺構内出土遺物(1)土壙

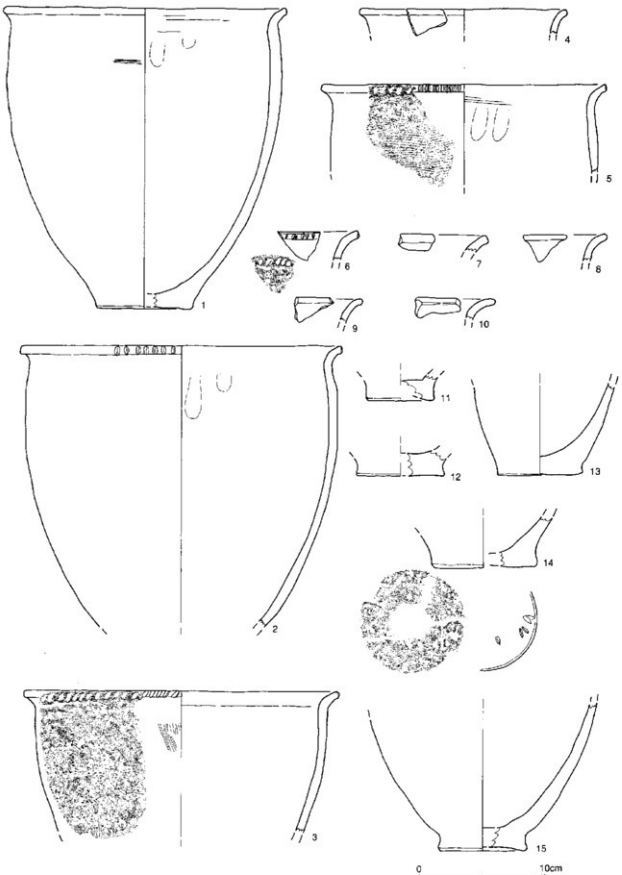


Fig.13 弥生時代遺構内出土遺物(2)土壙

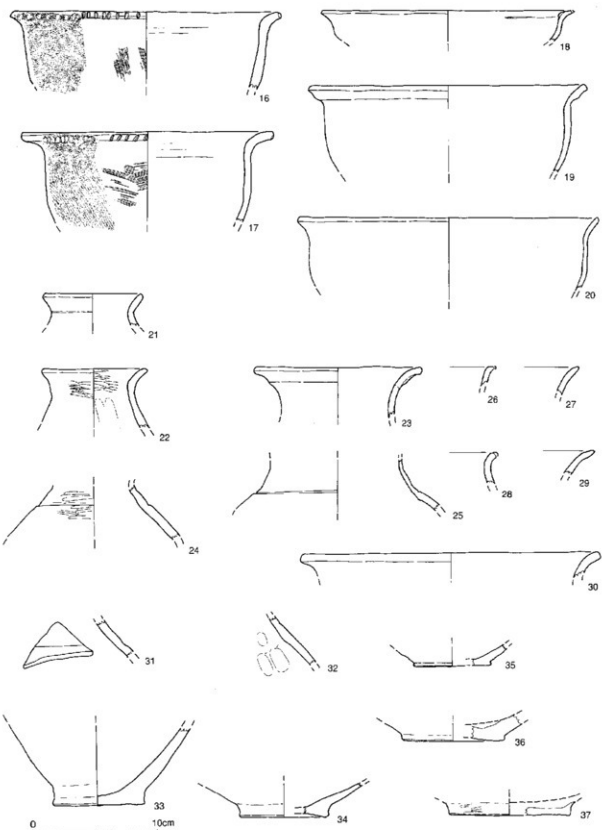


Fig.14　弥生時代遺構内出土遺物(3)土壙

部まで直線的にすぼまり、口縁部は強く外反する。口唇部下端に刻目を施す。底部は薄く仕上げられている。4～7は口縁部破片である。4は1,3と同様に突帯をもたないもの。5,7は胴部上位に刻目突帯を巡らすものである。また、6は口縁部破片で突帯の有無は不明である。いずれも口唇部下端に刻目をもつが、7の突帯上には刻目を施さない。8,9は甕底部であるが、いずれも薄く仕上げられている。壺は口縁部破片がある。10は口径約40cmの中型壺であり、強く外反する口縁部外面に粘土を貼り付け段を設けている。口唇部は断面コ字形に強いナデで仕上げられている。内面に横ハケが一部残るが他は横ミガキで仕上げられる。

SK32　調査区中央南側で検出された。SC19床面下で確認された。SD15に切られている。平面は不整楕円形で、長軸1.4m、幅1.1mを測る。遺物の出土はない。

SK33(Fig.16)　調査区中央東側で検出された。検出時にSD15に切られているのが確認された。平面は不整楕円形で、長軸1.5m、幅1.3mを測る。覆土中から少量の土器片が出土した。土器は同一個体と見られる甕(3)がある。3は口縁部が外反し、胴部上位から直線的にすぼまる。底部はやや厚みがある。口唇部は丸く仕上げられ、刻目はない。

SK34(Fig.16,18)　調査区中央区東側で検出された。検出時にSD15に切られているのが確認された。平面は不整円形で、径約0.4mを測る。覆土中から少量の土器片と石器が出土した。土器片には甕(5)がある。5は口唇部破片であり、強く外反し、断面コ字形を呈する。口唇部下端に刻目を施す。石器には石斧破片(18)がある。石材は今山産玄武岩であり、刃部に近い小破片である。断面から復元すると幅約8cm、厚さ約4cm程度の大きさとなる。

SK35(Fig.16)　調査区北側で検出された。SC10との切り合いがあるが、検出時には前後関係は不明であった。平面は不整楕円形で、長軸0.9m、幅0.5mを測る。覆土中から少量の土器片と黒耀石片が出土した。土器には甕(4)がある。4は口唇部破片であり、強く外反し、断面コ字形を呈する。刻目はない。

SK37　調査区中央東側で検出された。検出時にSB25に切られているのが確認された。平面は不整楕円形で、長軸2.0m、幅1.3mを測る。少量の土器片、黒耀石片が出土した。図化できるものはない。

SK40　調査区中央東側で検出された。検出時にSD15に切られているのが確認された。平面は略円形で、径1.4mを測る。

SK41　調査区中央で検出された。検出時にSD15に切られているのが確認された。平面は不整楕円形で、長軸約2m、幅1.2mを測る。

SK42　調査区中央南側で検出された。検出時にSD27に切られているのが確認された。平面は不整長楕円形で、長軸2.1m、幅0.4mを測る。

SK43　調査区西側で検出された。平面は不整楕円形で、長軸1.3m、幅1.0mを測る。

3)その他の遺構出土遺物

ここでは弥生時代以降の遺構でありながら、弥生時代の遺物を出土した遺構についてふれる。これは共伴関係はもちろん同時代性も疑わしい資料を含んでいる。通常は報告において削除されるか、二次的資料として一括で扱われるべきものである。しかし、本遺跡では弥生時代の遺構密度が比較的希薄である。後世の掘方内に弥生時代遺物が混入する可能性は、後の攪乱により弥生時代遺構の破壊を伴う場合が想定される。実際、古墳時代遺構では弥生時代遺物を含む場合と、全く含まない場合があった。こうした点から、後世の遺構から出土した遺物でも共伴する、あるいは関連する遺物群の可能性がある弥生時代遺物は遺構ごとに報告しておく。ただし、その利用に当たっては注意されたい。

SX05(Fig.17～19)　奈良時代に埋没した段落ち状遺構である。弥生時代の遺物が少量出土した。遺

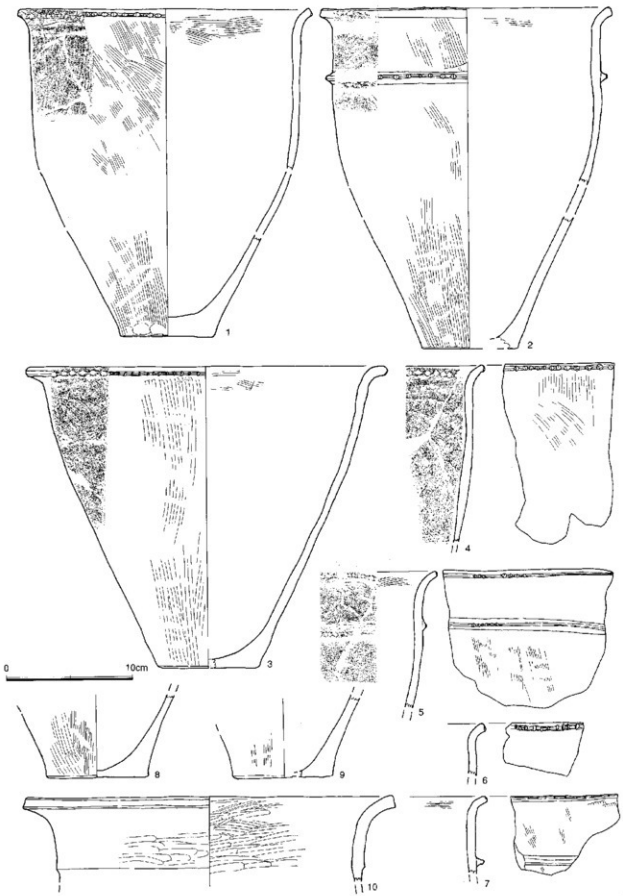


Fig.15　弥生時代遺構内出土遺物(4)土壙

物には土器類、石器類がある。土器類には鉢(1)、甕(11)がある。1は口縁部の破片であり、口縁部が強く外反する。口唇部は端面がコ字状にナデられている。11は甕底部である。胴部が強く広がり器面はナデ仕上げである。底面には葉脈圧痕が残る。突帯文系土器の底部と見られる。石器には石鏃(6,10)、黒耀石片、石斧(15)などがある。6は漆黒色黒耀石であり、先端と両脚端を欠損する。復元するとわずかに抉れをもつ三角鏃であり、長さ約3.0cm、幅約2.0cmとなる。7は灰色黒耀石であり、先端と片脚を欠損する。復元するとわずかに抉れをもつ三角鏃であり、長さ約2.0cm、幅約1.5cmとなる。15は太形蛤刃石斧の先端部破片である。今山産玄武岩を素材とし、幅約8cm、厚さ約4.5cmを測る。

SD39(Fig.17)　奈良時代の土壙である。弥生時代の土器類が比較的まとまって出土した。また、黒耀石片も出土した。土器には甕片(6〜10)がある。6は口縁部の破片であり、口縁部が強く外反し、頸部に二条の沈線を巡らす。外面は斜めのハケ調整であり、口唇部下端に浅い刻目を施す。7、8は口唇

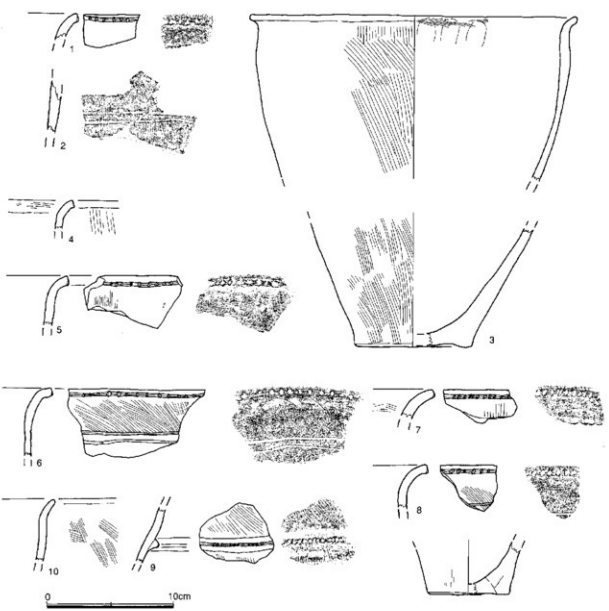


Fig.16　弥生時代遺構内出土遺物(5)土壙

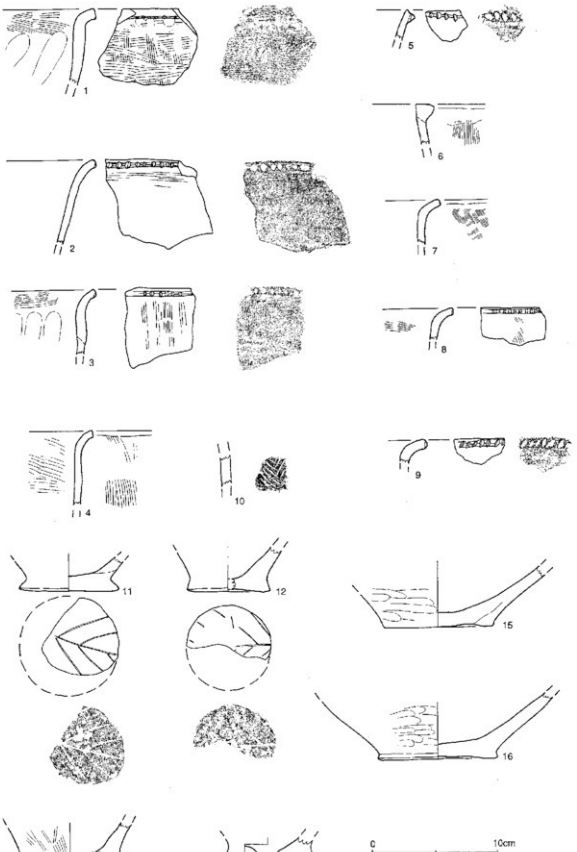


Fig.17　弥生時代包含層出土遺物他(1)

部に近い小破片であり、同様の特徴をもつ。8には頸部に一条の沈線が認められる。9は頸部の破片であり、一条の断面三角形の突帯を巡らせる。突帯上には浅い刻目が施される。10は甕底部である。胴部に向かって垂直に近く立ち上がる。底はやや厚みをもつ。

SD15(Fig.17)　古墳時代以降の溝状遺構である。少量の土器片と黒耀石片が出土している。土器片には甕底部(13,14)がある。13は底裾部を強く引き出し、外面にハケ調整がある。14は底裾部を次第に引き出している。

SC10(Fig.17)　古墳時代住居である。少量の土器片、黒耀石片が出土した。土器片は壺底部(15)がある。中型の器形で、外面は丁寧なミガキが施される。

4)包含層出土の遺物 (Fig.17～20)

包含層中や遺構検出時にも弥生時代遺物が出土した。これらは包含層出土遺物として取り上げた。以下に主な遺物を示す。この遺物には土器類と石器類がある。土器類には甕(2～9,12)と壺(10,16)がある。甕には口縁部破片(2～9)と底部破片(12)がある。口縁部破片には、口縁が外反し口唇部下端に刻目を施すもの(A1類、2,3)、同様の器形で口唇部全面に刻目を施すもの(A2類、8,9)、刻目がないもの(B類、4,7)、直立する口縁部外面に断面二角形の突帯を貼り付け刻目を施すもの(C1類、5)、刻目を施さないもの(C2類、6)などがある。底部破片は裾部がやや引き出され、わずかに上げ底で、底面に葉脈圧痕が残る。壺は中型壺の底部破片であり(16)、底面に円盤貼り付け状の段がある。

石器には旧石器時代、弥生時代、弥生時代以降のものが含まれている。

旧石器時代の石器には、三稜尖頭器(1)、剥片(2)がある。三稜尖頭器(1)は漆黒色黒耀石の横長剥片を素材とし、腹面、背面稜から大きな剥離で形成され、その後微調整を施している。先端部をわずかに欠失するがほぼ完形である。現状で長さ7.2cm、幅2.7cm、厚さ1.7cmを測る。剥片(2)は暗灰色半透明黒耀石を素材とし、平坦打面で剥離面調整を施した後に剥片剥離を行っている。剥片縁片に微細な剥離があるが、風化状況が

出土遺構	石核	石鏃	他石器	剥片	砕片	合計
表採	4	5	1	23	14	41
SD01	0	0	0	2	4	6
SD02	0	0	0	1	0	1
SD03	1	0	0	0	0	1
SC04	0	0	0	0	1	1
SD05	5	2	0	15	22	44
SC09	0	0	0	0	1	1
SC10	0	0	0	2	2	4
SC11	0	0	0	2	1	3
SC14	2	0	1	0	0	2
SD15	0	0	0	4	0	4
SC16	0	0	0	0	1	1
SC19	1	0	0	0	0	1
SB21P3	1	0	0	0	0	1
SB23P4	0	0	0	0	1	1
SB24P2	0	0	0	1	0	1
SK26	0	0	0	1	0	1
SK28	0	0	0	15	20	35
SK30	0	0	0	2	0	2
SK35	1	0	0	0	1	2
SK37	1	0	0	2	1	4
SK39	0	0	0	1	0	1
SC44	4	0	0	3	3	10
SP06	0	0	0	0	1	1
SP16	0	0	1	0	0	1
SP18	0	0	0	1	0	1
SP19	0	0	0	0	1	1
SP37	1	0	0	0	0	1
SP43	0	0	0	0	2	2
SP65	0	0	0	0	1	1
SP69	0	0	0	0	1	1
SP83	0	0	0	0	1	1
合計	21	7	3	75	79	185

Tab. 2　井相田C遺跡3次調査出土石器類一覧

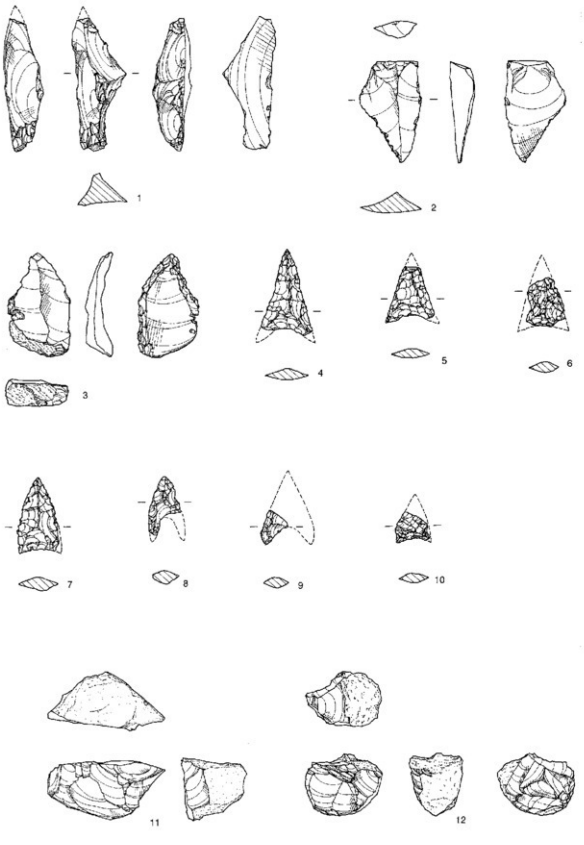


Fig.18 出土石器(1)

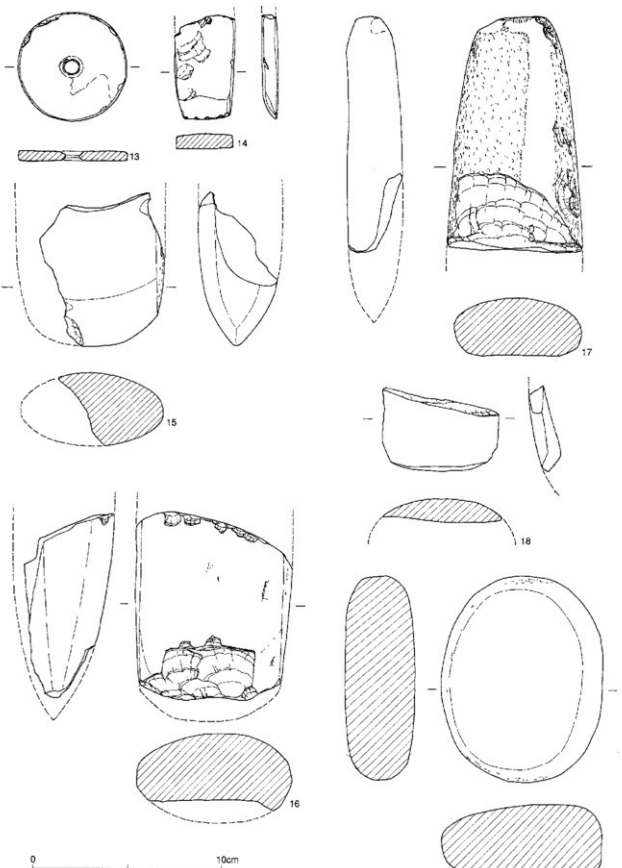


Fig.19 出土石器(2)

異なり使用痕とは考え難い。

弥生時代の石器には石鏃(4,5,7～9)、磨石(19)がある。石鏃は石材がサヌカイトのもの(4,5,7)と黒曜石のもの(8,9)がある。4,5,7はわずかに抉りの入る三角鏃である。4は両脚、5は先端と片脚、7は片脚をそれぞれ欠損する。磨石は砂岩で完形である。両面に研磨痕があり、長軸両端に敲打痕がある。

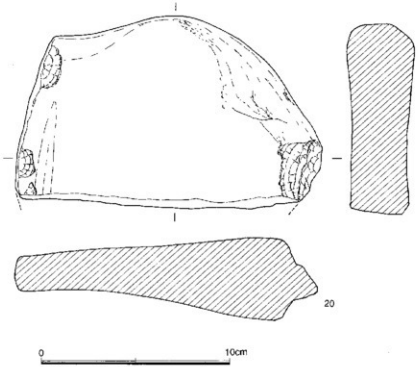


Fig.20　出土石器(3)

弥生時代以降の石器には砥石(20)がある。砥石はやや粒子の細かい砂岩製である。半分を欠損するが、両面に研磨面がある。所属時期は不明であるが、本遺跡の状況から弥生時代から古代の範疇に含まれよう。遺跡全体での剥片石器類の出土はTab.2にまとめた。

第4章　まとめ

1、井相田C遺跡の地形復元と遺跡環境

井相田C遺跡では本報告の3次地点を含めて、1999年までに5回の発掘調査が行われている。それぞれの調査地点では、弥生、古墳時代、古代、中世の集落や水田関連の遺構が多数発見されている。また、同時に旧河道や多くの水路や溝が検出されている。遺跡を取り巻くこの地域は御笠川左岸の低位段丘面であり、現在は平坦な土地になっているが、往時は相当複雑な微地形があったことが推定される。また、少量ではあるが、1次、3次地点では旧石器時代遺物も確認されている。北側の井相田D遺跡の縄文時代の埋没林の検出と併せてみると、低位段丘下に埋没した更新世段丘面の存在が推定される。同じ御笠川左岸の太宰府市脇道遺跡では低位段丘下の埋没低地から後期旧石器時代の遺跡が発見されていることも傍証となろう。

一方、1985年の1次調査以降、本遺跡についてはさまざまな研究が行われている。1，2次調査で発見された7世紀後半から9世紀代の集落や木簡、墨書土器などについては、駅家などの官衙関連遺跡との理解が示され、1次調査の溝状遺構は大宰府から那津に向かう官道の関連遺構の可能性が指摘されている。また、2次調査の中世溜井から出土した卒塔婆や柿経には隣接寺院と中世信仰についての検討がおこなわれた。さらに、3，4次調査では弥生前期の土器類が出土し、板付遺跡の隣接地としてその資料価値はけっして低くない。

本遺跡の調査は今後も進んでゆくことが予測される。こうした調査成果を今後の資料として生かすためには、遺跡の立地や地形変化を正しく見極める必要がある。ただし、現時点では地形復元を行え

るだけの充分な情報は少ない。発掘調査と周辺の試掘調査成果を元に予測を示したい。

1)井相田一帯における低位段丘微地形の復元（Fig.21）

井相田C遺跡1，2次調査西～南側は低地となり、水成堆積物がみられる。旧国道3号線や並行する那珂古川沿いは幅200m前後の範囲で砂礫層や粗砂層など厚い河川堆積物がみられる。麦野丘陵との間には埋没時期の不明な旧河道が存在している。この旧河道は現地形からみて大野城市山田付近の御笠川から分流し、川原、仲島遺跡南側を通り、改修以前の那珂古川に沿っていると推定される。麦野丘陵東側に形成されている樹枝状の開析谷はすべてこの旧河道に注いでいる。

この那珂古川沿いの旧河道と御笠川の間は標高13～12mのほぼ平坦な低地となっているが、この中

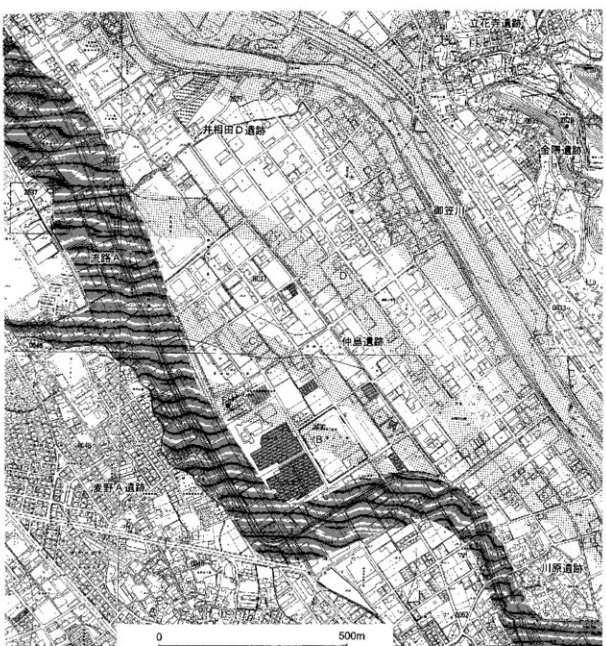


Fig.21　井相田一帯における低位段丘微地形の復元

にも幾筋かの流路跡がみられる。まず、1．2次調査区西側の那珂古川の旧河道を**流路A**とする。この流路Aは麦野丘陵に沿って北流し、高畑、板付遺跡方面へ延びている。この水量は比較的多く、弥生～古墳時代の用水利用から現在の農業用水としても利用されている。次に井相田C遺跡1，2次調査北東端の落ちと4次調査南西端の流路跡は位置関係から同一の流路と見られる。これを**流路B**とする。この流路Bは幅約80m前後で、おおよそN－60～70°－W方向に流走するとみられる。5次調査南～西側も方向から見てこの流路Bの一部と考えられる。さらに3次調査東側に検出されたSD05はこの流路Bとは別の流路と考えられる。5次調査区の東側が若干地形の落ちがある事から見て隣接して流路が伸びていると見られる。この二ヶ所での落ちを一連の**流路C**とする。この流路Cは仲島遺跡との間を抜け、幅約50～100mで、おおよそN－40～50°－W方向に流走するとみられる。なお、大野城市から福岡市にまたがる仲島遺跡は幅100m前後、長さ約1,000mの範囲にあり、御笠川左岸の自然堤防とも言われる微高地上に立地している。仲島遺跡と御笠川の間には流路が存在していることが大野城市の発掘調査により明らかにされている。これを**流路D**とする。これはおおよそN－30～40°－W方向に流走するとみられる。このようにみると流路B～Dは大野城市山田付近を基点に御笠川左岸の低地に放射状に延びていることになる。流路A～Cの埋没時期は発掘調査による出土遺物から推定できる。流路Aは大きく3回の堆積時期に分かれ、縄文時代晩期から中世に及ぶ遺物が出土している。少なくとも縄文晩期には埋没を開始し、中世まで流路が存在したと見られる。流路Bは古墳時代から中世までの遺物が出土し、埋没の下限は流路Aと共通している。流路Cは埋土中から古代から中世の遺物が出土している。埋没の開始はやや遅れるが、下限は他の流路と共通するようである。

それぞれの流路の間は微高地となり、集落遺跡などが確認されている。微高地の名称は次のように仮称する。那珂古川沿いの流路Aと流路Bの間は井相田D遺跡1，2次地点があり、これを**微高地1**とする。流路BとCの間は3，4，5次地点があり、**微高地2**とする。流路CとDの間は仲島遺跡があり、**微高地3**とする。流路Dと御笠川の間の微高地もしくは自然堤防の存在は未確認である。

こうした流路A～Dと微高地1～3は、分布範囲や堆積状況から御笠川の氾濫により形成されたデルタ状の地形の一部であることがわかる(Fig.21)。

微高地の基盤はシルト、砂質、砂礫層などの河川堆積物からなる。これは下山(1989)により提唱された「住吉層」に相当するとみられる。井相田D遺跡2次では現在の地表下約4m、標高約10mで縄文時代前期の埋没林が検出された。埋没林を覆う砂礫層は仲島遺跡がのる微高地3か流路Dの延長方向にある。ただし流路Dの埋没開始時期は古代とみられ、埋没林の形成と年代に開きがある。この埋没林は流路Dから運ばれた砂礫に埋もれたものとは考え難く、むしろ微高地や自然堤防を形成する河川堆積物に覆われたものと考えられる。埋没時期もアカホヤ火山灰(Ah)層を挟む「住吉層」の堆積年代と矛盾しない。位置から見てこの埋没林はアカホヤ火山灰堆積以降の「住吉層」の形成にともない埋没した可能性が高い。したがって微高地1～3を形成する河川堆積物は縄文時代前期以降、いわゆる「縄文海進」以後に形成されたと考えられる。御笠川流域の縄文海進による最も内陸の海成層分布限界線は博多区東比恵付近にあり(下山1993)、井相田C遺跡の北方約5Km付近にある。「縄文海進」による海水面の上昇は現海水面より数mと復元されており、標高約10mのこの付近は直接に海水面の影響は受ける地域ではない。しかし約2mとされる博多湾の潮汐の影響もあり、この井相田付近にデルタ状の堆積が形成されたと考えられる。

以上の点を踏まえてこの地域の自然地形の変遷を推定するなら、以下のようになる。

縄文時代前期以前の御笠川左岸の低位～中位段丘面は、御笠川に並行して形成された段丘面をなしていたと見られる。その段丘を切り麦野丘陵から流れる小河川が展開する状況であったと推定され

る。しかし「縄文海進」以降、この低位段丘面は御笠川山田付近を扇央部として形成され始めたデルタ状の河川氾濫堆積物に次第に覆われていった。こうした河川堆積物は標高約20mの麦野丘陵上までは覆うことがなく、むしろ麦野丘陵段丘崖に沿って幾筋かの小河川を合流した新たな流路Aを形成した。なお氾濫時の複数の河道跡は、堆積の安定後も微高地間に中世まで流路B～Dとして痕跡を留めていたと見られる。

2)低位段丘微高地における土地利用と遺跡の推移

この地域の「縄文海進」以前の地理的状況は明らかでない。花粉分析などから福岡市井相田付近から大野城市山田付近は低位段丘には照葉樹林が繁茂し、その中を麦野丘陵から流れる小河川が開析する状況であったと推定される（パリノ1999）。井相田C遺跡1，3次調査における旧石器時代後期資料や、井相田D遺跡における縄文前期遺物からみて、埋没した低位段丘面に後期旧石器時代～縄文時代前半期遺跡の存在が予測される。大野城市御笠川大野城橋下地点では、神子柴型石斧の他エンドスクレイパーや数点の剥片などが採集されている（横田1992）。二次的な堆積も否定できないが、埋没段丘面での遺跡の存在も念頭に置いた追跡調査が望まれる。微高地形成以後の縄文時代後半期も不明であるが、縄文時代晩期後半（弥生時代早期）～弥生時代前期にはこれらの微高地上が安定し、集落が現れる。井相田C遺跡3，4次、大野城市川原遺跡、仲島遺跡などでは遺構や遺物が検出されている。この時期には微高地上に集落が、そして流路沿いに水田が開かれたと見られる。しかしこの水田は、幅100m前後の湿潤な旧河道に設けられたと見られ、2kmほど南に位置する板付遺跡周辺の水田耕地にくらべて小規模と考えられる。こうした土地利用の状況は以後、基本的に古墳時代から古代末まで続いている。微高地は削平された竪穴住居跡などからみて、流路や低地との比高差が1m前後あるために、微高地そのものの水田としての開発は長く困難であったと見られる。井相田C遺跡1次調査では古代前期において微高地上に広く畑が作られていたことが確認された。なお流路沿いの水田面は灌漑用の水路の掘削をともない、古墳時代以降に次第に微高地側への拡大が認められる。古代末期（11世紀頃）に微高地上の集落は途絶え、微高地の削平が行われている。また、縦横に用水路と見られる溝が掘られている。この時点で微高地は削平され、流路は埋めたてられて、広域な水田面が形成されたと考えられる。古代以降、植生は照葉樹が減少し、かわってマツ属など二次林の形成が予測されていることもこの地域の人為的開発が広範囲にわったことを裏付けている。その後この低地部は幾度かの用水路の付け替え、耕地改変を経て現在の地形になったと見られる。

おおまかな流れを示したが、より詳細な内容は今後、発掘調査や試掘調査、試錐調査、また花粉分析なども積極的に取り入れ、より精度の高い地形変化の解明と遺跡の推移復元が行われることを望みたい。

〈参考文献〉

下山正一1989「福岡平野における縄文海進の規模と第四紀層」『地質学』16巻1号　九州大学理学部

下山正一1993「北部九州における縄文海進極盛期の海岸線と海成層の上限分布」『文明のクロスロード』44号

横出義章1992「いわゆる神子柴型石斧の資料(三)」『九州歴史資料館研究論集17』九州歴史資料館

パリノ・サーヴェイ株式会社1999「井相田D遺跡の古環境復元」『井相田D遺跡第2次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第610集

2、井相田C遺跡3次調査における集落遺跡の様相と出土遺物

井相田C遺跡3次調査では保存状況は良好でないものの、各時期の遺構、遺物が検出できた。おもな遺構は住居跡、土壙、溝などであり、微高地上の集落の一部であるとみられた。どの遺構も相当の削平を受け、遺存状況は良くない。削平後に堆積した包含層には古代末に比定される磁器片が出土していた。この削平は水田開発に伴う大規模な造成に伴うものと見られる。

以下では、比較的資料がまとまって検出された弥生時代前期と古墳時代後期の様相についてふれる。

1)井相田C遺跡における弥生時代前期の様相

弥生時代の遺構は竪穴式住居2棟と土壙14基が検出できた。遺構の時期について出土遺物から概観しよう。本遺跡で比較的多くの土器類を出土した遺構にはSK27,28,30がある。時期区分の基準となることから以下に再度示す。器種の区分は古留1994で示した分類基準を用い、本報告での分類を( )内に付記した。

SK28出土土器は、甕4a(A)類,4b(B)類、浅鉢2類（高坏)、深鉢4,5類、壺2a,3a類がある。甕4b類の増加など新しい様相をもちながら、甕5～7類や大型壺2b,3b類などを含まない単純な組成を示す。甕4a、深鉢4類の口唇部刻目は浅くなり、下方から施すものもあるが、なお口唇部全面的に施されている。これは筆者の7式に位置づけられる。他にSK33出土甕4b類が胴部から底部の特徴からこの時期に位置づけられる。

SK31出土土器は、甕4a,7a,7b類、壺2a類がある。個体数や器種は少ないが完形品を含む単純な資料である。甕4a,7類の口唇部刻目は小さく浅く、口唇下端に施される。著者の8式に位置づけられる。この時期の他の遺構としてはSK30、34それと古代遺構SK39混在遺物などがある。SK30,39では甕6類が含まれている。

SK27出土土器は、甕9類、深鉢4類がある。このうち甕は明らかに2型式に分けられる。報告でA類とした甕は甕9類の典型と見て良いが、B類とした甕は口縁部貼り付けの外方への引き出しが強く、断面が逆「L」字形に近づいている。また、甕、深鉢いずれの口唇部にも刻目は施されない。かつて著者はこの資料を9式の範疇で考えたが、先の様相はむしろその後段階である城ノ越式に下げるべきであろう。ここにその位置づけに訂正したい。この時期の他の遺構は未検出である。

なお、竪穴式住居は削平のため、遺存状況が悪く時期を示す土器類の出土はない。いずれも平面形が方形を基調とする住居である。SC14は8式段階のSK31に切られていることから7式以前と考えられる。SC44は壁溝内に柱穴がある特殊な長方形住居であり、雑駒隈遺跡や大谷遺跡で確認されている。立壁式住居の可能性があり注意しておきたい。いずれの住居も小型の部類にいる。調査範囲が狭く、集落の全体像は明確にできない。

さて、井相田C遺跡の弥生時代前期の遺構、遺物は、本調査地点以外では同じ微高地2上にある4次調査区で検出されている。4次調査では貯蔵穴とみられる長方形土壙が多数検出され、流路Bにも土器、石器類を含む包含層が形成されている。出土遺物として6～9式の土器類が出土している。

以上の成果からみて、この井相田C遺跡の弥生時代集落は微高地2の北半部の南北約200m、東西約100mの範囲に拡がる、弥生時代前期中葉（板付II式古相：6式）から中期初頭まで続く集落遺跡と考えられる。

この時期の御笠川中～上流域の集落としては雑駒隈遺跡や太宰府市前田遺跡などがある。両遺跡は著者の6～7式に相当し、本遺跡とほぼ同時期に出現している。雑駒隈遺跡は大型の円形住居と小型の方形住居から構成され、前田遺跡は小型の方形住居のみから構成されている。いずれも集落規模は小さく、板付遺跡のような環濠集落形態をなさない。ただし、構成される住居形態に差異があり、何

らかの差異を示していると見られる。井相田C遺跡がそのいずれの様相であるかの現時点で即断できない。遺跡の詳細な検討は今後の調査にまちたい。

2)古墳時代後期集落の出現と経営単位

3次調査では古墳時代後期の集落の一部が確認できた。遺構としては竪穴式住居10棟、掘立柱建物5棟、溝8条がある。出土遺物と遺構の切り合いから集落の推移を概観したい。

微高地縁辺を沿って南北に掘られた溝SD06と、緩慢に掘られた溝SD01,02,15,36は出土遺物から須恵器Ⅲb期新段階～Ⅳ期にあたり、切り合いから見ても調査区内では最も新しい段階に位置つけられる。SD06とSD01、36は幅約20m離れてほぼ並行する。さらにこれに直角方向に溝SD02,15が掘られている。SD06は連続し調査区外に延びて覆土下部に砂質土を含むが、他の溝はいずれも端部がとぎれ、覆土も腐植土で砂質を含まない。SD06を除いてこれらの溝は灌漑用水路とは考え難く、集落内の区画溝と考えられる。区画溝に囲まれた範囲は東西幅約20m、南北10m以上あり、調査区内には4区画が見られることになる。またこの区画溝に切られる住居SC04,19や溝SD03などが存在する。SC04はⅢb期古段階には埋没しており、区画溝はこの集落形成以後、一定の時期を経て設けられたと考えられる。一区画内には竪穴式住居2～3棟、掘立柱建物数棟があり、それぞれ数回の建て替えが見られる。厳密に同時期の建物は抽出困難であるが、例えば、SC12、16とSB21が一単位、SC06、08とSB23が一単位とみると、竪穴式住居2棟と掘立柱建物1棟で一単位を構成していると見ることもできる。

同様の区画溝と建物の関係は井相田C遺跡4次調査でも確認される。ここでは布留式新段階から古代〔8世紀〕までの遺構、遺物がみられる。そのなかで須恵器Ⅲb期新段階～Ⅳ期に微高地縁辺と並行、直行して区画溝(SD07,09,16,18,19)が設けられている。ちなみにこの溝と微高地縁辺とは約20mの幅があり、その中に竪穴式住居、掘立柱建物などが数棟が設けられている。3次調査区と同様の区画単位が予測される。

井相田C遺跡では古墳時代集落はこの微高地2だけに展開している。律令期になると微高地1にも集落が形成され、微高地2は規模が縮小するようである。集落全体の様相は未調査部分がなお広く、多くを語ることはできない。先の1単位の区画は最小規模の経営単位とみることも可能であろう。しかし、その内容はあまりに小規模である。3，4次調査は100m以上離れている。これが連続した集落であるとすると先の区画単位は相当の数が存在すると予測される。この区画は集落形成以後一定の期間を経て、須恵器Ⅲb期新段階～Ⅳ期に集落全体に設けられたと考えられる。今後、集落の構造と成立、再編、廃絶の具体相の解明を通じてその背景が検討されるべきである。

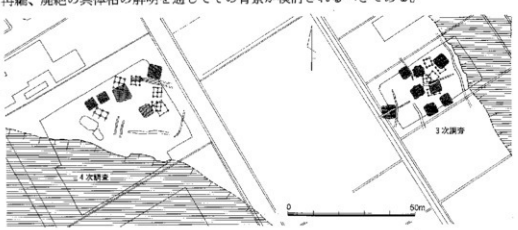


Fig.22　井相田C遺跡3・4次調査区の古墳時代後期遺構分布

図　版

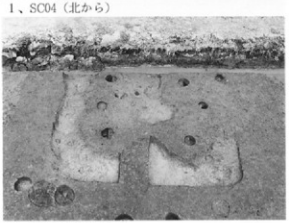
1、井相田C遺跡３次調査全景（東から）

2、SX05（北から）

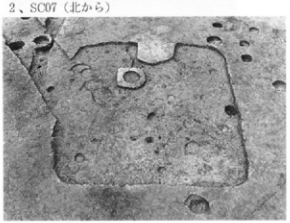
PL.1　全景他

1、SC04（北から）

2、SC07（北から）



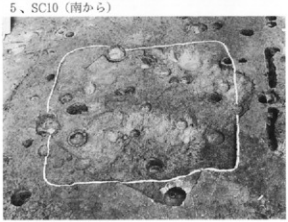
3、SC08（北から）



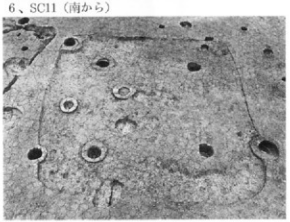
4、SC09（西から）

5、SC10（南から）

6、SC11（南から）

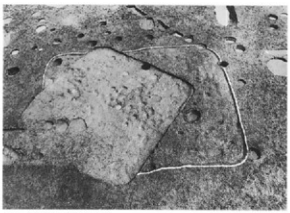


7、SC12（南から）



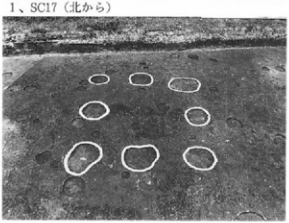
8、SC16（南から）

PL. 2　竪穴式住居

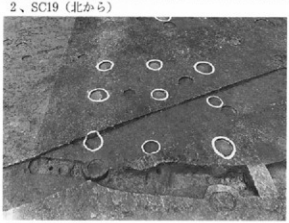


1、SC17（北から）

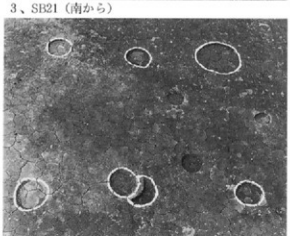
2、SC19（北から）



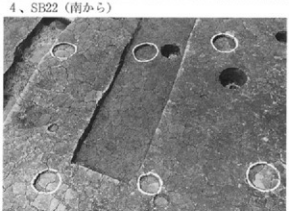
3、SB21（南から）



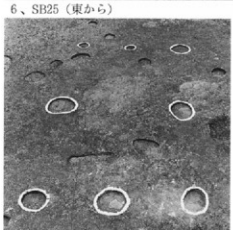
4、SB22（南から）



5、SB24（東から）



6、SB25（東から）



7、SB23（東から）

PL.3　竪穴式住居、掘立柱建物

1、SD01（北から）

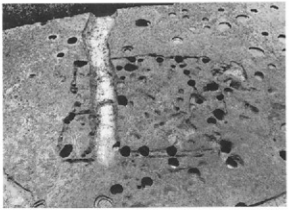
2、SD06（南から）

3、SD15（西から）

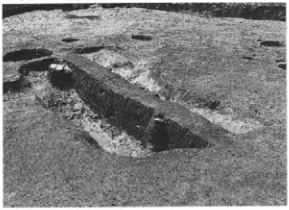
4、SK42（北から）

PL.4　溝、土壙

1、SC14（南から）

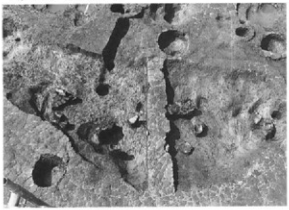


2、SC44（北から）

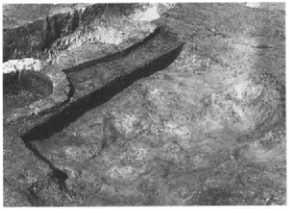


3、SK27（南東から）

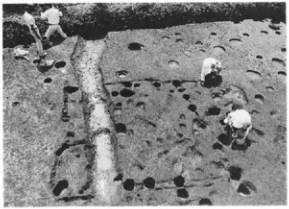
4、SK30（北から）



5、SK31（南から）



6、SK32（南から）



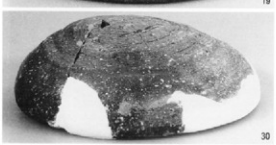
7、SC44調査風景（北から）

8、調査風景（東から）

PL.5　竪穴式住居、土壙、その他

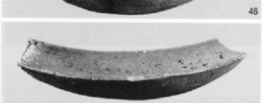
18

19

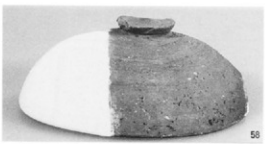

30

45

46


47

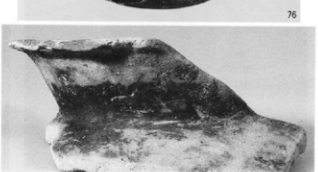
48


58

61

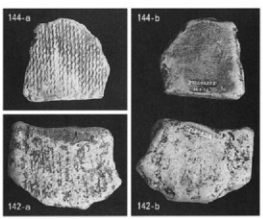
75

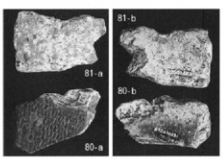
76

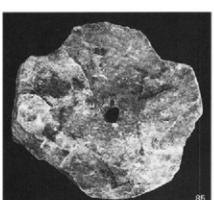

74

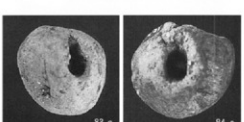
※数字は実測図の番号に一致する。以下同じ

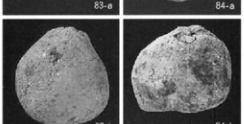
PL. 6　溝SD01、05出土遺物

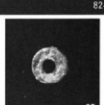




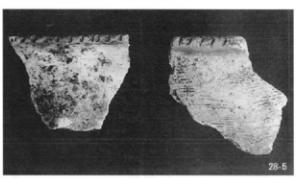


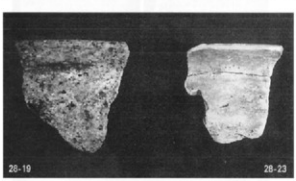


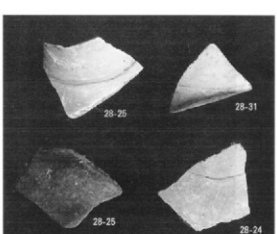


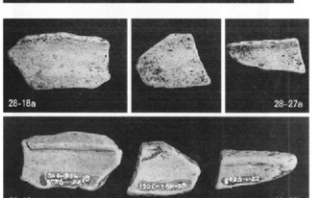


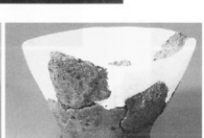
PL. 7　溝SD05出土遺物



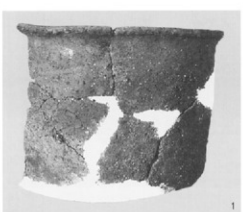


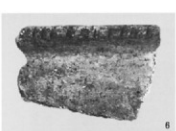


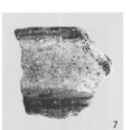


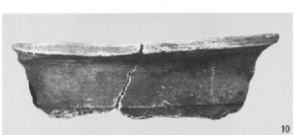


PL. 8　土壙SK27、28出土遺物









PL. 9　土壙SK31出土遺物

30-1

30-2

27-2

27-7

34-5

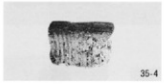
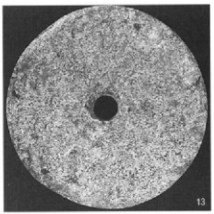
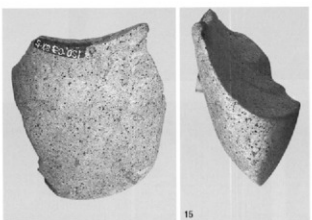

35-4

図-10

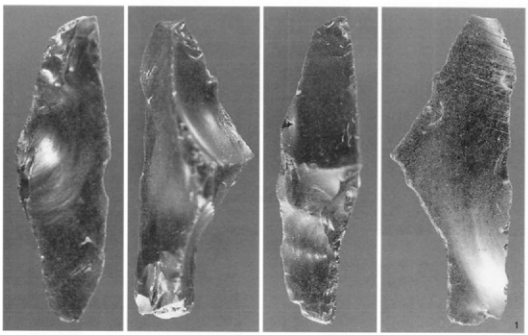
31-5

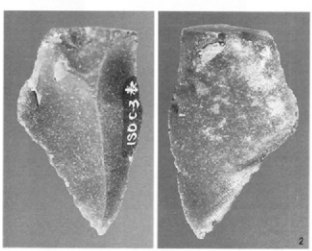
PL.10　土壙出土遺物等

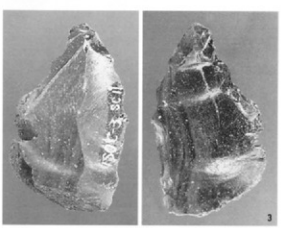


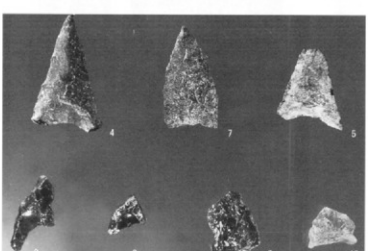


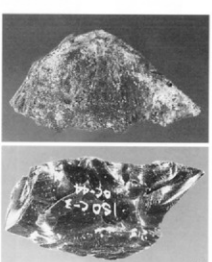
PL.11 出土石器（1）











PL.12 出土石器（2）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第658集

井相田C遺跡　5

－井相田C遺跡第3次発掘調査報告書－

2000（平成12）年3月31日
発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1
印刷　株式会社エイコー社
福岡市西区周船寺3－19－9